

令和7年度 アートプロジェクト支援事業 活動報告集

FUKUI ART ANNUAL REPORT 2025 PROJECT



Fukui Art Project



目次

- 3 はじめに
- 4 福井のアーツカウンシルについて
- 6 福井における「アートプロジェクト」とは…
- 7 アートプロジェクト分布図
- 8 活動紹介 ①
- 13 担い手インタビュー ① アートを開く場をつくる
はりいしゃレジデンス事業 おさのなおこさん
- 14 活動紹介 ②
- 20 担い手インタビュー ② 「うら(裏)」から始まる、私たちの場所づくり
河野ローカルミュージアム 田上夏伊さん
- 21 活動紹介 ③
- 26 担い手インタビュー ③ 過去を保存し、現在と未来をつなぐ営み
小さな記録を持ち寄って、 丸山 達也さん
- 27 活動紹介 ④
- 33 担い手インタビュー ④ 今を生きる私たちがつくる、これからの民話
おくえつ民話の創作 木村有希さん、山本響さん、佐藤実紀代さん
- 34 採択団体 イベントチラシ
- 36 インタビュー「福井のまちに文化の種をまく人たち」
朝倉由希さん(公立小松大学)
- 37 寄稿「文化で“幸福”を編み直す ―福井のアーツカウンシルの静かな挑戦―」
関 鎮京さん(北海道教育大学)
- 38 福井のアーツカウンシルのこれから
採録「文化芸術ミーティング2025」パネルディスカッション
- 42 スタッフ座談会 福井のアーツカウンシル 始まりの記録と現在地
―期待と手探りの間で歩み続けた2年半―
- 46 県民の声と応援メッセージ
- 48 編集後記

はじめに

公益財団法人 福井県文化振興事業団は、昭和57年に、県民の文化活動を盛り上げて創造性豊かな福井をつくる目的で設立されました。その後、平成9年の県立音楽堂のオープン以降、音楽堂の管理運営を担うようになり、現在まで様々な音楽文化振興事業を展開しています。

一方で、県における文化政策の方針も変化しており、令和4年度には、事業団内にアート振興部が設立され、アートプロジェクト支援事業助成金を開始しました。

令和6年4月には、福井県の文化政策の指針となる「福井県文化振興プラン」の策定を経て、令和7年4月に「ふくい文化創造センター」を開設。この間、アートプロジェクト支援事業を中核としたアーツカウンシル機能を備えるべく、人員も増強しながら、アートプロジェクトの伴走支援ができる基盤強化を進めてきました。

この4年間で、我々と活動団体とのコミュニケーション頻度も増え、活動団体の企画内容も変化してきております。また、我々自身も学びを深めているところです。

本活動報告集は、福井のアーツカウンシルについてご紹介するとともに、この4年で培ってきたアートプロジェクト支援事業助成金の採択団体による多様な活動を広く知っていただける内容としました。

一見すると「捉えどころのない」アートプロジェクト。しかし、そこには担い手の皆さまの確かな情熱と、地域や未来を想う真摯な眼差しが溢れています。本活動報告集を通じてその魅力に触れていただき、皆さまとお会いできることを心より願っております。



福井のアーツカウンシルについて

福井のアーツカウンシルのミッション

県民のウェルビーイングと地域の活力が相乗的に高まる好循環を創出する社会の実現を目指して「みんなで創る文化でつながる人と地域が輝く福井」を掲げる福井県文化振興プランのもと、福井のアーツカウンシルは、以下のミッションを掲げ、様々な機能を備えています。

ミッション：県民主体の 多種多様な文化芸術活動を 複雑さを保ちながら より多く未来に残していく

コンセプト：“耕し” “見つけ” “育て” “支え” “残す”

耕す……多種多様な文化芸術活動が発生する、また活動しやすい土壌作りを行う。

見つける……文化芸術活動の種や「担い手」(*)を発掘、また見出していく。

育てる……文化芸術活動の種を芽吹かせ、「担い手」を逞しくしていく。

支える……育ってきた文化芸術活動やすでに長く続いている活動を励まし、支えていく。

残す……文化芸術活動を分析・記録し、環境(しくみ)を整え、より多くの多様な活動を未来に引き継いでいく。

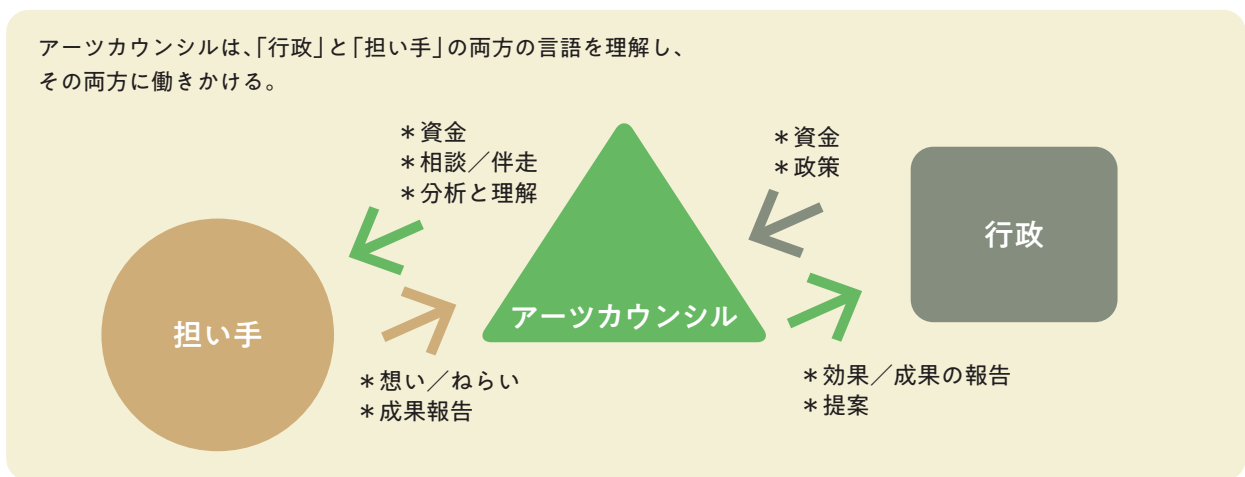
*「担い手」:一般的に広義では、「文化の担い手」とは、文化活動に関係する人々を広くさす、ここではアートプロジェクトをはじめとする文化芸術活動を企画・運営する主体のことを指す。



アーツカウンシル機能について

コンサルティングとサポート	相談対応	アートプロジェクト立ち上げや計画策定などへのアドバイス
	情報提供	参考事例や資料の提供
	伴走支援	採択プロジェクトの計画実行に向けた助言、関係団体や分野との橋渡し
	フォローアップ	プロジェクトの持続・発展に向けた方向性の確認、他分野他団体との連携、資金調達などへのアドバイスと誘導
研修・交流	ケーススタディやワークショップ、「担い手」同士の交流機会の創出(例:アート茶会)	
調査・検証	課題、改善点の調査。レポート・報告の作成	

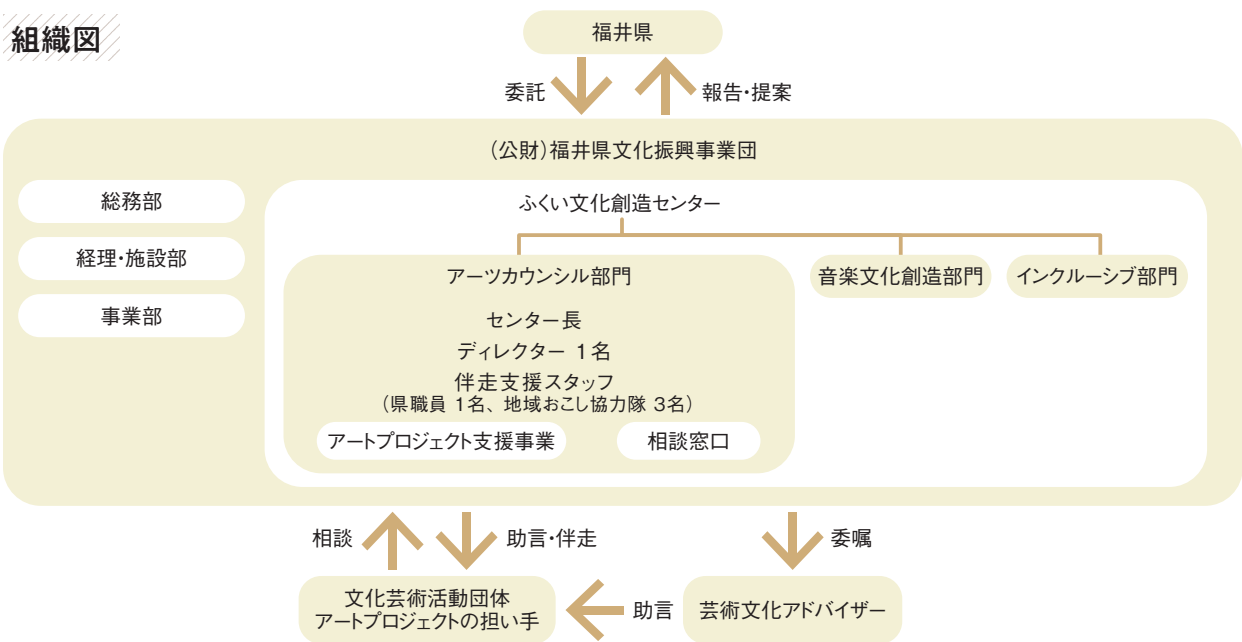
我々の役割



これまでの経緯

昭和57年(1982年)	(公財)福井県文化振興事業団の設立 県民の文化愛好の機運を盛り上げ、個性豊かで創造性に富んだ福井の文化づくりの振興を目的として設立
平成9年(1997年)	(公財)福井県文化振興事業団が県立音楽堂の管理者に ※平成18年度からは指定管理者として管理運営
令和4年(2022年)	県は文化活動への補助金から助成金に転換(アートプロジェクト支援事業) 事業団内に「アート振興部」を設ける
令和5年4月(2023年)	アート振興部内の人員を徐々に増強 ※地域おこし協力隊を毎年1名増員(3年間)
令和6年4月(2024年)	県が「福井県文化振興プラン」を策定
令和7年4月(2025年)	事業団内に「ふくい文化創造センター」を設置

組織図



芸術文化アドバイザー

福井県文化振興事業団は、さまざまな芸術文化分野の専門家等に「芸術文化アドバイザー」を委嘱しています。アドバイザーは、県内で文化芸術活動を行う団体や個人に対して助言や提案を行う役割を担い、そのうち「アートプロジェクト担当」は、アートプロジェクト支援事業を中心に、採択団体に対する助言を行うとともに、アーツカウンシルに対しても意見や提案を行っています。

芸術文化アドバイザーの紹介

- 朝倉由希** (文化政策、アートマネジメント)
公立小松大学国際文化交流学部准教授、文化庁文化審議会文化政策部会臨時委員
- 浅野桃子** (美術)
現代アート作家、福井工業大学環境学部デザイン学科教授
- 遠藤幹子** (建築、デザイン)
建築家、京都芸術大学大学院教授
- 加藤種男** (文化政策、メセナ)
クリエイティブ・ディレクター、(公財)福井県文化振興事業団副理事長
- 窪田研二** (現代アート、キュレーション)
インディペンデント・キュレーター
- 野田訓生** (現代美術、メディア芸術)
美術研究者、金津創作の森美術館館長
- 吉村正照** (UI/UXデザイン)
仁愛女子短期大学生活科学学科生活情報デザイン専攻准教授、ナナナ株式会社代表取締役

福井における「アートプロジェクト」とは…

アートプロジェクトは、県民の自由な発想と、県民の願い、文化芸術の柔軟性を組み合わせ、地域に開かれたプロセスを重視した県民主体の活動です。関わる人々が新たな気づきと発見を持って日常に帰っていくことで、地域社会において新たな価値を創り出し、未来を切り開く可能性を秘めています。

人口が減少し、変化が激しく先行きが不透明な現代社会は、高齢化、過疎化、コミュニティの希薄化など様々な課題を抱えており、県民の自由な発想がこうした課題解決の糸口になると考えています。



令和7年度のアートプロジェクト支援事業助成金の枠組み

助成区分	内容	上限額(助成率)
特定プロジェクト支援	チャレンジ枠	複数の文化団体や他分野と連携して企画実施する新たな文化芸術事業 200万円(10/10)
	インクルーシブ枠	障がいの有無にかかわらず参加・体験できる文化芸術事業
	次世代育成枠	次世代を担う子どもの創造力や表現力を養う文化芸術事業 50万円(10/10)
	担い手育成枠	文化芸術活動の担い手を育成する事業
プロジェクト支援	新たな地域の文化創造に寄与する文化芸術事業	150万円(2/3)
地域の魅力向上支援	活動基盤強化枠	地域の魅力向上に寄与する継続的な文化芸術事業 50万円(1/2)
	活動活性化枠	既存事業に新たなチャレンジを盛り込んだ文化芸術事業 20万円(1/2)

年間スケジュール



新たな担い手の掘り起こし(出会い)

担い手の課題を把握・助言

個別相談会(助成金応募の前に目指す姿の共有・助言)

資金的な支援(助成金の支給)

イベント等の開催の視察→経験の共有

新たな可能性の提示

次年度の事業計画のレベルアップ

相談／助成／伴走の流れ

アートプロジェクト分布図

- 凡例
- 特定プロジェクト支援
 - プロジェクト支援
 - 地域の魅力向上支援 活動基盤強化枠
 - 地域の魅力向上支援 活動活性化枠

福井・永平寺エリア

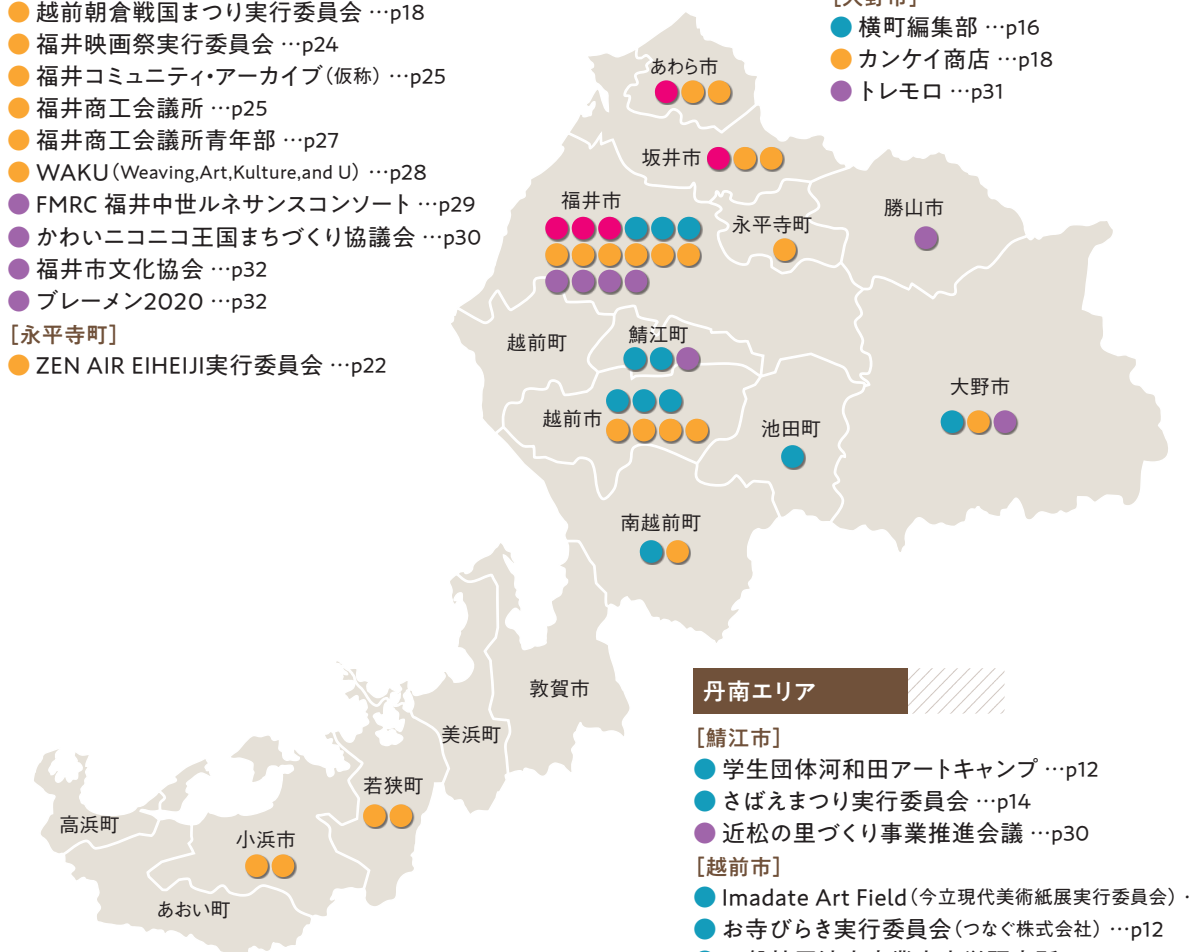
- [福井市]
- 奇談プロジェクト実行委員会 …p8
 - 「みんなで舞台に立とう」を広げる会 …p9
 - NPO 法人福井芸術・文化フォーラム …p10
 - ギャラリーはりいしゃ運営委員会 …p14
 - 特定非営利活動法人 日本さきの文化振興会 福井支部 …p15
 - ふくいまちなかムービープロジェクト …p16
 - 越前朝倉戦国まつり実行委員会 …p18
 - 福井映画祭実行委員会 …p24
 - 福井コミュニティ・アーカイブ(仮称) …p25
 - 福井商工会議所 …p25
 - 福井商工会議所青年部 …p27
 - WAKU(Weaving, Art, Kulture, and U) …p28
 - FMRC 福井中世ルネサンスコンソート …p29
 - かわいニコニコ王国まちづくり協議会 …p30
 - 福井市文化協会 …p32
 - プレーメン2020 …p32
- [永平寺町]
- ZEN AIR EIHEIJI実行委員会 …p22

あわら・坂井エリア

- [あわら市]
- こども美術館実行委員会 …p9
 - 一般社団法人あわらテクノロジー協議会 …p17
 - わくにこ実行委員会 …p29
- [坂井市]
- 湊ノ芸術祭実行委員会 …p8
 - うたのおくりもの実行委員会 …p17
 - トランペット☆ヒーローズ …p23

奥越エリア

- [勝山市]
- ちゃまアート実行委員会 …p31
- [大野市]
- 横町編集部 …p16
 - カンケイ商店 …p18
 - トレモロ …p31



丹南エリア

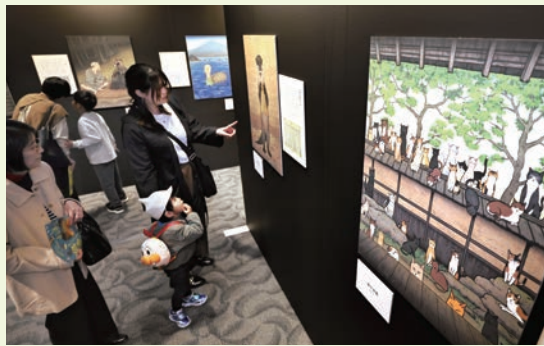
- [鯖江市]
- 学生団体河和田アートキャンプ …p12
 - さばえまつり実行委員会 …p14
 - 近松の里づくり事業推進会議 …p30
- [越前市]
- Imadate Art Field(今立現代美術紙展実行委員会) …p10
 - お寺びらき実行委員会(つなぐ株式会社) …p12
 - 一般社団法人産業人文学研究所 …p15
 - 源氏物語アカデミー委員会 …p19
 - シネマ ダイアログ ラボ …p22
 - 武生国際音楽祭推進会議 …p23
 - 日独交流神和紙展実行委員会 …p24
- [池田町]
- 一般社団法人うみのいえ …p11
- [南越前町]
- うらのこうの …p11
 - 現代芸術研究会 …p21

嶺南エリア

- [小浜市]
- 嶺南地域映像文化醸成プロジェクト …p27
 - 若狭小浜ちりとして落語の会 …p28
- [若狭町]
- きらりアート展実行委員会 …p19
 - 心からコンサート実行委員会 …p21

奇談プロジェクト実行委員会

奇談プロジェクト2025



福井の奇談をアートと古文書で読み解く「THE 奇談」展

- ① 展覧会: 「The 奇談 妖怪絵師マツ・マイヤーの世界」
 実施日: 11月15～24日
 場所: 福井新聞社風の森ホール
- ② イベント: じんたん妖怪縁日(奇談・妖怪イベント)
 実施日: 11月15日、16日、24日
 場所: エルパイベントスペース

福井藩の公文書である松平文庫などの県内に残る古文書に記載された奇談や妖怪伝承を調査・研究し、アートや展示を通じて現代的に可視化することで、福井に根付く文化や物語の価値を再発見し、再構築することを目指す。妖怪絵師であるマツ・マイヤー氏と、県文書館司書・長野栄俊氏の協働を核に、出版、展覧会、イベントなどを展開し、独自の地域文化資源として国内外へ発信、誘客と地域の活性化を図る。

担い手の声

松平文庫など古文書の記録と結びつけた作品展示は、知っているようで知らなかった地域の物語を提示し、郷土史への関心を喚起しました。また妖怪という親しみやすいテーマを入口とすることで、若年層やファミリー層にも開かれた文化事業となりました。今後は単発的な展覧会に留まらず、年間を通じた循環型事業として継続的な文化創造へ発展させていきたいです。

担当者の声

妖怪は、かつて身近なものだった。福井も例外ではなく、私たちの先輩たちは、この地で、何を考えて、何を怖がり、何を大事にしていたのか。奇談や民話は、知識だけではなくそのイメージや肌触り(感覚)も

教えてくれる。私たち(今の人)は、それをどのように見てどう解釈し続けるのか。これから生まれる共同作業や交流の中で何が見えてくるのか、楽しみです。



こども美術館実行委員会

こども美術館



ふくいのけしきをあつめて、クリスマスツリーをつくろう!

- ふくいのけしきをあつめてクリスマスツリーをつくろう!
- ① クリスマスツリーワークショップの日
 実施日: 12月6日・12月7日
 場所: 金津創作の森・創作工房
- ② 作品展示の日
 実施日: 12月17日～12月21日
 場所: 金津創作の森美術館 ホワイエ

福井県の産業廃材を使ったこどもたちへのワークショップと、出来上がった作品の展示を行う。捨てられるはずの素材がアート作品に生まれ変わる体験を通して、創作活動を楽しみながら地域や素材とのつながりを感じる体験を提供する。こどもたちが、のびのびとアートに親しむ未来を目指して、アートをもっと身近なものとして捉えるきっかけを作りたい。

担い手の声

活動を重ねると、未就学児は自由に描くことを楽しむ一方、参加者の年齢が上がるにつれて「自由に描くこと」の難しさが見られました。そこで、フィールドワーク→考える→表現→発表という流れを取り入れると、考えを整理しながら手を動かし、表現へとつなげる変化が見受けられました。作品は展示会后、各自に返却し、活用してもらう形としました。今回はアフレアを展示会場とし、ツリーをお披露目する機会を設け、多くの人に作品を見てもらうことができました。今後は地元の催しへの参加など、地域の中で表現する場を広げていきたいです。

担当者の声

福井の廃材や自然は、日常の中でその存在を感じることは多くありません。その二つの要素が入った作品制作という“非日常”を経験して、参加者の子どもたちや親御さんたちが日常に戻った時に、当たり

前だった生活が新たな景色に見えているなら、作品は何にも替え難い宝物ですね。宝物を生み出す“非日常”の作り方、今後も楽しみにしています。



湊ノ芸術祭実行委員会

湊ノ芸術祭2025

坂井市三国町旧市街地の空き家や空き地を舞台に、アーティストが滞在制作を行い、作品を展示する地域芸術祭「湊ノ芸術祭」を開催した。まちなかに点在する作品群を巡りながら回遊することで、来場者がアートを通じて町の風景や空気を体験する構成とした。作品はインスタレーション、演劇、刺繍、詩、音楽など多様な表現で制作された。



当日の作品の様子 三澤亮介/Zigen[+Beyond] / 氷川神社社務所

湊ノ芸術祭2025

- 実施日: 9月26日、27日、28日、10月4日、5日
 場所: 三国町内の空き家等

担い手の声

湊ノ食堂では水産・農業従事者と連携し、まちのダイニングでは帯のまち流しと協働するなど、若手中心の小規模な実践から地域全体を巻き込む祭りへと発展しました。学生団体カセットを軸に大学生が継続的に参画し担い手が育成され、展示に活用した空き家の再流通も生まれています。アーティストと住民の交流も広がり、新たな関係人口の創出につながりました。今後はこれらの成果を基盤に産業・不動産・文化を横断する連携を強化し、持続的な地域活動へ展開していきます。

担当者の声

まちを歩き、ギャラリー(空き家)を巡りながら、同時に、まちの記憶や魅力を再発見する体験が創出されています。準備から開催まで、その一連の活動から生まれる交流や移住などの変化にプロジェクトの

可能性を感じています。アーティストと地域住民、活動を支える人など、「三国に関わる人」の層が広がり、関係が育まれていくことを願っています。



「みんなで舞台に立とう」を広げる会

だれもが文化芸術を鑑賞・体験できる機会の創出

～福祉事業所などに出向いてのワークショップの実施～あなたの場所に文化を届ける

文化芸術活動に関わる機会の少ない人たちの活動の場や生活の場に出向くことで、文化芸術を享受したり、プロの優れた文化芸術に触れたりする機会をつくる。出向いた先で、障がいのある方や高齢の方などの支援に携わる方々と話し合いをすることで、互いにワークショップを作り上げる意識を醸成していく。さらに、障がいの有無に関わらず、インクルーシブな文化芸術活動の担い手を増やす。



砂連尾さんのワークショップの様子

担い手の声

福祉事業所の方と共にワークショップを行うことで、利用者が普段は見せない表情や動きを見せる、支援者の支援やケアという考え方の変化が見られるなど、生活の場に文化芸術がある良さを感じてもらえました。本会員もこの活動に手ごたえを感じている一方、プロの方に頼りすぎ、本会のキャストなどがうまく関わることができなかった反省があります。それを踏まえ、今後もこの取り組みを継続できるよう、プロの方から地元のアーティストや本会のキャストやスタッフへ移行し、担っていけるような仕組みを作っていきたいです。

- ① 福祉事業所に出向いてのワークショップ
 実施日: 9月～2026年1月(計6回)
 場所: 県内の福祉事業所
- ② 事業報告会と交流会
 実施日: 2026年1月30日
 場所: 田原町ミュージズ

担当者の声

ダンサー・振付家の砂連尾さんと協働し、文化芸術をどうやって届けていくか? 訪問先の福祉作業所の皆さん、ミナブタのメンバー、時に作業所の職員の方も参加してワークショップが作られてい

く。身体の動きを使ってお互いを理解する新鮮さに、その場にいる全ての人が気づきを得る時間でした。自分たちのやり方をゆっくり探していく旅を、ずっと応援しています。



コンテンポラリーダンスを通じた担い手育成事業



2026年2月1日 稽古の様子

- ①市民参加作品制作(ワークショップ、稽古)
実施日：10月～2026年2月
場所：田原町ミュージ・フェニックス・プラザ
講師：縫原弘子
アカンパニスト：Nui conte Unit 6名
- ②コンテンポラリーダンスフェスティバル in ふくい
実施日：2026年2月8日
場所：フェニックス・プラザ小ホール

コンテンポラリーダンスの市民参加作品制作と公演・ワークショップの開催。市民参加作品は障がいのある方を含めた、多様な方との作品を創作する。作品制作を通じて、ワークショップのファシリテーターやコーディネーター人材を育成する。

担い手の声

「Nui conte Unit」が障がいのある人をサポートする「アカンパニスト」としての確かな成長を2年目の今年は手応えとして実感しました。ワークショップや稽古以外の時間でも、障がいのある人を自然にサポートする姿がありました。文化芸術の場で出会うことは、障がい者／健常者という境界があいまいになり、フラットな関係ができることも広めていきたいです。今後は、より多くの方にコンテンポラリーダンスを知ってもらうため、地域の身近な場所でコンテンポラリーダンスに触れられる企画を行い、参加する人や参画する人といった担い手を増やしていきたいです。

担当者の声

コンテンポラリーダンスに興味のある参加者が複数回のワークショップを通して本番に望む。ワークショップをコーディネートしている縫原さんにアート茶会でもその一部を実際に体験させてもらいました

が、私もやってみて初めて「こういうことなのかも？」という感覚を得ました。市井の参加者がコンテンポラリーダンサーになるとき、一体何が起きるのでしょうか。楽しみです。



うみのいえ「アーティスト・イン・ファミリー」事業 第4期



滞在先のあちこちで同時多発的に対話が発生した様子

滞在と創作：11月15日～24日(10日間)
発表：11月23日
場所：うみのいえ、および池田町内

アーティスト・イン・ダイアログを通じ、多様な分野のアーティストが池田町の自然・文化・暮らしを題材に滞在し、対話と議論を重ねながら自由な発想で制作を実験する。異分野間の創発を引き出し、地域資源の再発見と関係人口の拡大、文化交流の促進につなげる。住民との交流も行い、成果は小規模展示や報告会で共有する。

担い手の声

滞在中の連日の対話やフィールドワーク、住民・主催者との接触を通じ、芸術家には多くの思索や気づきが生まれ、今後の制作へ向かう具体的な動機づけとなりました。展示・報告会では作品背景を起点に来場者との議論が生まれ、地域の魅力や課題を言語化・共有する機運が高まりました。主催者は運営ノウハウを蓄積し、協力者の輪が広がりました。今後はテーマ設定、交流導線、成果のアーカイブ化を改善し、地域に定着する最適な形を探りつつ継続したいと思います。

担当者の声

アーティストのホームステイ「アーティスト・イン・ファミリー」により、池田町に表現者が集い、土地の魅力が再発見されています。アーティストとの生活により子どもたちは自然と「つくり」「展示する」と

いう挑戦を行いました。この試みは、日常にアートが溶け込むモデルとして、全国へ広がっていく可能性を秘めています。



Imadate Art Camp Workshop 2025

和紙の生産は有名だが、利用に関してはそれほどではない。県内どの地域も、少子化・高齢化・まちづくり継承・文化財保全などの様々な地域課題は共通している。特色ある取り組みを行うことで、解決したいこれらの地域課題に対して、子どもの時から郷土愛の精神を育みたい。和紙の行燈ワークショップや展覧会の開催を通じて、地域におけるまちづくりや環境保全に資する取り組みを行い、和紙と地域との結びつきを醸成する。

担い手の声

地元の岡本地区自治振興会や栗田部地区自治振興会、イベント「ラブ・ネチャーハッ杉」を運営するグループなどの連携によって、地域住民を対象にした和紙を活用したワークショップが開催できました。今後は、様々な国からのアーティストと地域の人々のコラボレーションを図り、国際交流の重要な機会を作っていくような活動にも注力したいと思います。



墨流しワークショップの様子

- ①墨流し団扇づくりワークショップ、ミニ和紙行燈ワークショップ
実施日：8月23日～9月15日
場所：越前市ハッ杉森林学習センター、いまだて芸術館、越前手わざ工房
- ②和紙漉き行燈ワークショップ
実施日：9月19日～10月20日
場所：越前市岡本公民館、越前手わざ工房

担当者の声

アーティストの滞在制作作品の展覧会を中心として取り組んできた活動に加え、公民館や地域サロンなどで住民の方が参加できる和紙を使った作品作りのワークショップを開き、徐々に地域の皆さんとの関

わりが増えています。国内外のアーティストと地域との交わりから生まれる人と人との交流に、和紙文化を共有する場を広げる可能性を感じました。



河野ローカルミュージアム

展望は「地域をまるごと博物館」化することである。“地域”という屋根のない博物館に【地域の宝+地域生活の専門家である住民+アーティスト+観光客】が点在している状態を目指す。今年度はまち歩きイベントと冊子制作に向けた取材を行う。地域住民を案内人にまち歩きイベントを行い、集落の魅力の掘り起こし、再発見を行う。制作した冊子はフリーペーパーとして県内外各地で配布する。



まち歩きイベント「のこのこのうの」フラッグ

担い手の声

小さな活動の継続を通じ、地域住民との関係性が着実に蓄積されていることを実感した1年でした。今年は他団体との初コラボに挑戦し、40名規模の受け入れに成功するなど、運営の新たな可能性を感じられました。また、あえて従来のスタイルを崩した企画を試行したことで、自分たちの本来の良さや今後の課題を再認識できたことは大きな収穫です。今後は、この気づきを糧に「うらのこの」らしい独自のスタイルを磨き上げ、より深く地域に根ざした持続可能な活動を目指します。

- ①まち歩きイベント「のこのこのうの」
実施日：8月23日、10月12日
場所：南越前町河野エリア河野地区、赤萩地区
- ②コラボイベント「南越前町フォトウォーク」
実施日：10月18日
場所：南越前町河野エリア甲楽城地区

担当者の声

地域おこし協力隊時代から代表の田上さんが関わる河野地区では、住民が自身の住む地区について活き活きと語ります。参加者はその話に耳を傾け、シャッターを切り、気づきを住民に還元していきます。

す。一朝一夕では実現しないこの光景が、河野のゆるぎない「価値」になっているように思います。この実践は、県内に限らず全国の過疎地の希望になるのではないのでしょうか。



アートを開く場をつくる

はりいしゃレジデンシー事業

おさのなおこさん

越前海岸を目の前に臨む旧街道に、そのギャラリーはある。鍼灸院だった古民家を改築改装したから、名前は「はりいしゃ」。2019年に家族とともに移住した版画家のおさのなおこさんは、三角屋根が目を引くこのギャラリーに県内外からアーティストを招き、さまざまな人々に交流と出会いを提供しながら、活動を広げている。

「ここなら何かができるかもしれない」

私が越前海岸に移り住んだのは、2019年の冬のことです。東京・町田で子育てと制作を続けながら、いつかは自然の近くで暮らしたいと漠然と考えていた頃、先にこの地へ移住していた友人を通じて「地域おこし協力隊」という制度を知りました。当時は「まちづくり」に強い関心があったわけではありませんが、アート分野で積んできた自分の経験が役に立つならやってみようと思いました。過疎化と高齢化が進む見知らぬ土地で、両親や親戚と離れて暮らすことに不安もありましたが、雄大な景色と独特の風情に心をつかまれました。何より、初めてこの古民家に入った時、「ここなら何かができるかもしれない」と直感したのです。幸い、ガラス作家やきこりなど、越前海岸を盛り上げようと業種を越えて活動している同世代の仲間も背中を押してくれました。改装はクラウドファンディングで資金を集め、自分たちで行いました。

2021年12月、ギャラリーのオープンに合わせて知合いの版画家を滞在制作に招いたのを皮切りに、ガラス作家や画家など、これまで12人のアーティストが来てくれました。なかには作品だけお借りして展示することもあります。平均すると10日ほど滞在し、ここでしか出会えない人や風景、素材に触れながら、それぞれの視点で創作する人が多いです。そういうプロセスこそが「はりいしゃ」の核であり、今後は1カ月ほどの長期滞在も始める予定です。

また、2024年からは地元の国見小学校とも連携し、アーティストがはりいしゃに滞在中に子どもたちと一緒に創作する活動も行っています。ドイツの美術大学で学ぶ若手作家たちが交流授業を行った際、子どもたちの表情がみるみる変わっていった様子は忘れられません。普段はあまり発言しない子が積極的に話しかけたり、自分が描いた絵について照れながら説明したりする様子は印象的で、心に焼き付いています。

場所をつくり、共感をあつめる

とはいえ、地域との関係づくりは簡単ではありません。

このあたりは漁村で、手先が器用な人は多く、手仕事の素地もある一方、「アート」「芸術」という言葉に敷居の高さを感じる人もいれば、外から来る人を皆がもろ手を挙げて歓迎するという雰囲気でもありません。それでも、近隣の学校が6学年合わせても生徒が10人いなかったり、廃校が決まったりして地域に活気がなくなっていくことを危惧して私たちの活動に真剣に関わってくれる人もたくさんいて、私たちも海岸清掃などの地域行事にはできる限り参加し、日常的に地域の皆さんと顔を合わせる機会を大切にしています。

今後の課題の一つは、持続的な運営資金の確保です。これまでは、アートプロジェクトの助成金のおかげで、アーティストに滞在制作をしてもらう際の移動費や材料費、交流イベントやワークショップなど、活動の幅を広げられましたし、頻繁に足を運び、相談に親身に乗ってくれるふくい文化創造センターの皆さんには精神的にも支えてもらっています。しかし、助成金に頼り続けるだけでは持続的ではないので、今後は、はりいしゃを宿泊施設として整備し、収益を生む仕組みづくりにも取り組みたいと思っています。

クリエイターとして表現する側の人間だった私が、今は空間を整え、アーティストを迎え、イベントを企画するアートプロジェクトの裏方として活動しています。アーティストが滞在制作の過程で変わっていったり、展示会に来た人が感動したり、子どもたちの感性が引き出されていったりする瞬間に立ち会うたびに私の中に眠っていた感覚が刺激され、私自身の創作も変わりつつあるのを感じます。

最近はおかげさまで「はりいしゃという場が好き」と言ってくれる人が、少しずつですが県の内外に増えてきました。作品だけでなく、場所そのものへの共感——いわば「場のファン」が生まれており、続けてきてよかったとの思いがこみ上げます。人が集まり、滞在し、対話が生まれる出会いの場を守りながら、これからもアートを通じてこの土地と関わり続けたいと思っています。



(おさの・なおこ) 神奈川県出身 版画家。2019年に東京から福井県の越前海岸へ移住し、版画制作の傍ら「越前海岸盛り上げ隊」と連携した海辺の古民家ギャラリー「はりいしゃ」にてアーティスト招聘事業による地域活動を行っている。

つなぐ株式会社『お寺びらき実行委員会』

味真野 お寺びらき



福井大学の学生と連携で制作した屋台が並ぶ会場の様子

味真野 お寺びらき

実施日：11月8日、9日

場所：真宗出雲路派本山 毫攝寺および周辺寺院(福井県越前市味真野地区)

お寺のまち・味真野（あじまの）で、心がふっと軽くなる非日常体験を。地域に点在するお寺をまちの大切な資源と捉え、宗派を超えて子どもから大人まで誰もが気軽に集える催し。住民有志の実行委員会と各宗派の僧侶が力を合わせ、法話やトーク、越前万歳や落語、対話カフェ、まち歩きなど多彩なプログラムを展開。飲食や夜のたけ花灯りが境内を彩り、癒やしと賑わいに包まれる。心に残るひとときを届ける。

担い手の声

開催2回目となる今回は、福井大学や仁愛大学の学生との連携や、宗派・地域を超えた僧侶の協力、地域ボランティアの増加など、担い手の広がりが大きな成果となりました。これは継続的な広報活動の積み重ねによる変化であり、本事業の成長を実感する点です。一方で、2日目の雨天による来場者数の伸び悩みや、運営体制強化が課題として浮き彫りとなりました。2026年度は9月開催とし、体制整備と企画の磨き上げを進め、より持続可能な地域アート・文化連携事業を目指していきたいです。

担当者の声

住民や職人、学生が協働し、かつては当たり前だった「お寺がひらかれている」状態を非日常がきっかけとなり取り戻す挑戦。住民にとって見慣れたお寺に、多くの人が関心を持って集う光景を目の当たりに

することで、独自の歴史や文化を再認識し、誇りを感じながら温かな繋がりを取り戻し始めているように感じます。

学生団体河和田アートキャンプ

河和田アートキャンプ

大学生各々の専門性や特技を活かして地域を多角的にみることで生まれる新しい視点やアイデアと活気。それらを持って、地域の方へ提案、相談、議論を繰り返しながら地域に溶け込んでいく。初めは地域の外からの力だったものが活動する過程で地域の内からの力が加わり地域が活性化していくことを目的としている。

担い手の声

地域住民と協働する中で、学生は地域に対しての解像度があがり達成感を持ちつつも悔しさという名の向上心がかかえ次年度に向けて準備を始めています。地域住民は県内外の学生が見つけた地域の魅力を盛り込んだ活動や作品をきっかけに地域住民同士、地域住民と学生など会話を弾ませている光景を多く見ました。継続的に活動することで、地域資源を活かし協働制作を通して分野や世代をこえたつながりの拡大を目指していきます。

担当者の声

年毎に関わる学生の代謝がありながらも、継続20年間、河和田という地域で続く滞在制作。都心では得られないような圧倒的な自然のパワーを全身で浴びながら、地域の住民と共創しを、全力でアートプロ



河和田アートキャンプ20周年

年間を通した長期滞在型制作活動

実施日：4月1日～2026年3月31日までのうち約80日間

場所：鯖江市河和田地区

ジェクトに取り組む学生たち。成果お披露目会では、その作品群に魅了されました。地域や学生にとって大事なプロジェクトが生まれていることに感動が続いています。

はりいしゃレジデンス



国見小学校での交流授業（流木と石粉粘土で生き物制作）

- ①海辺のかれら リミナルダイバー
実施日：6月～リサーチ活動、10月 交流授業、11月1日～9日 作品展
場所：越廼、国見エリア、国見小中学校、ギャラリーはりいしゃ
- ②虹のしずく展
実施日：12月4日 交流事業、12月6日～11日 展覧会
場所：ギャラリーはりいしゃ

過疎化の深刻な越前海岸に位置する古民家を改修したギャラリーに、県内外や国外からのアーティストを誘致。地域の自然・文化・地域資源等を活用した作品を制作してもらい、展示会を行う。制作された作品や活動がアーカイブされることで、もともとある観光分野とも連携し、県外・国外から福井への来訪のきっかけを作り、地域の魅力を再発見する。作品鑑賞、作家との交流を通して文化・芸術・地域振興を促す。

担い手の声

アーティスト誘致事業「ギャラリーはりいしゃ」に対するコアなファン層を作ることができました。県内で活躍するアーティストに関わりを深めてもらったおかげで県内の持続的な取り組みの可能性を見出せました。また、小中学校での交流授業により、アーティストの感性に触れる子どもたちの体験は大変魅力的であったと評価されています。ただし、それが収益とは直結しにくいと、並行して収益事業を見つけてゆく等、他の財源を見つけていく努力をしている必要があると感じています。

担当者の声

美しい越前海岸・越廼地区で愛らしく出迎えてくれる「はりいしゃ」は、版画家おさのなおさんを中心に、地元有志たちにより支えられています。アーティストは「はりいしゃ」に引き寄せられ制作・展示する

だけでなく、ギャラリーを飛び出し地域で生きる子どもたちと共に創るという体験も生み出しました。その影響はじわじわと温かい愛情で地域内外に広がっています。



国際木版画ラボ／越前アーティスト・イン・レジデンス事業



海外のアーティスト29人の越前和紙を使った水性木版画作品約100点を卯立の工芸館で展示

- ①Basic Training Program
実施日：10月19日～11月22日／9月7日～10月11日
場所：国際木版画ラボ（MI-LAB）
- ②2025 MI-LAB成果展
実施日：11月30日～12月8日
場所：卯立の工芸館

国際木版画ラボ／越前アーティスト・イン・レジデンス事業は、水性木版画の技法を日本で発展させ、現代アートの分野で版画制作に従事する海外のアーティストに伝授するとともに、技法の今日的な進展を促進することを目指す。同時に、和紙や彫刻刀などの材料や道具の産業にも貢献し、その活性化を図ることを掲げている。

担い手の声

水性木版画の制作において和紙は必須条件だと考えています。しかしながら、国内外の和紙の流通においてアーティストが、画材店などで購入する和紙の材料や製法の適切な情報にアクセスできないという課題があります。私たちの事業では、和紙の主要産地に滞在し、水性木版画の制作に取り組みながら漉き屋との対話、工場見学を通じて顔の見える関係づくりを目指していきます。

担当者の声

レジデンスに参加した海外アーティストが帰国した先で「越前和紙」の魅力が自発的に広まっているとのこと。木版画アーティストにとって、制作に必要な素材と向き合える時間や、和紙職人の方々とアー

ティストとの間で設けられている対話の場は、地元の職人さんにとっても越前和紙を新たな視点で捉えなおし、その価値を再確認する大変貴重な機会となっています。



第2回 さばえまつり

さばえまつりは、多様な人々の関わりからさまざまな出来事が生まれるまちを目指して取り組む、「つくる」を祝う祭典。今回は、アーティストと多様な市民が協働し、「3つのまち」を実現させた。当日は今昔の暮らしを語り直す「巨大紙芝居」、繊維産業の廃材だけでつくる「幻の城」、高校生が中心に収集した「100色の帆」が西山公園に出現したほか、「焼き鯖」をテーマにした新たな盆踊りを発表した。



初日の夜に、参加者全員で2024年度に制作した「イッココ音頭」を踊った時の様子

担い手の声

第2回の開催を終え、参加した人々が移住したり、新たな活動に参画したり、起業したりと、さばえまつりは今や事務局・参加者を問わず新たな一歩が生まれるプラットフォームになりつつあります。今後は「まちに実際のインパクトを生み出す」「多角的なアクターが参画できる〈うつわ〉になる」「〈つくる〉を取り巻く通年型の場づくり」に取り組んでいきます。この2年間の過程を省察的に可視化し、成功や失敗を含めて公開することで、知の流通にも積極的に取り組んでいきます。

担当者の声

新たに3つの「まち」が動きはじめるとき、何が起きるのかワクワクしました。担い手・市民・アーティストがフラットに関わり合いながらつくれた「まち」は2日間の「祭典」にて参加者と共有されました。そ

れは、新しいことを作り上げることを楽しむ鯖江の土壌にぴったりの活動だと感じます。どんな人もそれぞれの距離感で「参加」できる仕組み素晴らしいと感じています。



みんなで創ろう！恐竜のジャンボキモノと福井アートきものフェスティバルショー

県を象徴する大きな恐竜像にきものを着せることで、小さなお子さんから大人まで、多くの人たちが興味を持ってくれるのではないかと。さらには、絹織物羽二重で日本一の主産地だった福井の繊維王国が誇るきものに興味も湧く人も増えるのではないかと。と考え、福井駅前のフクイラトル像にきものを着せる。きもの文化の伝承と啓蒙を図る。



寒い中、フクイラトルもきものファンを増やすために協力

担い手の声

恐竜像に着付けられたきものには、啓新高ファッションデザイン科と道守高の生徒ら計約120人が、恐竜をモチーフに考えたデザインをパッチワークのようにつなぎました。今後も、福井の若者にきもの文化を継承してもらうために、未来を担う学生がきものに関して学び、触れ合う機会を作り、当団体のテーマである「きものは日本の心」を浸透させていきたいと思っています。

- ①きものについてレクチャーときものに触れる体験
実施日：7月8日
場所：福井県立道守高等学校
- ②オープニングセレモニー（フクイラトルにきもの着装）
実施日：12月12日
場所：福井駅西口 恐竜広場

担当者の声

駅前の恐竜にきものを着せるという今までにないタイプのプロジェクト。実際に、今まで恐竜のモニュメントが着物を着たことはなかったそう。着物という日本文化をどのように継承していくか、恐竜を架け橋

に、福井県内の高校や大学へのレクチャーも積極的に行われました。とてもユニークで福井らしいプロジェクトだと感じました。



ふくいまちなかムービープロジェクト

ふくいムービーハッカソンならびに福井駅前短編映画祭



映画祭にて「ふくいムービーハッカソン」に関わった人たち

- ①ふくいムービーハッカソン
実施日：9月13日～15日
場所：福井駅周辺の中心市街地
- ②福井駅前短編映画祭
実施日：11月7日～9日
場所：コノジナガヤ、テアトルサンク

「幸福度ランキング」全国1位を連続して獲得しているが、その一つ、文化分野はかなり低い位置にある福井県。しかしその中でも「映画館数」は全国上位。そこに1500年続くものづくりのDNAと融合させ、文化とものづくりの取り組みを継続して、福井の認知度を高めていく。さらに映画祭で様々な感性の作品・作家たちと交流することで、福井の人たちの文化度が向上し、やがて世界から撮影で福井を訪れられることを願っている。

担い手の声

「ふくいムービーハッカソン」には、協賛企業の皆さん140名が参加され、チームワークの強化やものづくりの楽しさを感じてもらえました。また、「福井駅前短編映画祭」では本映画祭に加え、これまでの「ふくいムービーハッカソン」に参加くださった役者や監督、さらには全国の映画祭プロデューサーの皆さんをご招待してのトークイベントも盛り上がり、全国に広がる新しい取り組みも始まりそうです。映画は世界共通の「ものづくり」であり、自分たちで作り上げる楽しさは他にはないものと思っています。

担当者の声

駅前で、顔見知り人が人目を気にしながらも一生懸命演技していたり、それを撮影隊が真剣に撮影する。そんな風景が秋の福井の日常に溶け込む3日間。10回目となった今年は、全国各地から映画関係者が

集まる特別な会となりました。映画づくりをきっかけに、県民の世界が広がっていくことにワクワクします。



一般社団法人あわらテクノロジー協議会

子どもや若者を社会と繋ぐ、エンタメ×デジタルアート推進事業



イベント出展に向けたブース企画アイデア共有会「みせテクネ」の様子

- ①ブースのアイデアを出そうの会（ワークショップ）
実施日：11月15日
場所：新郷小学校（まぜテクネ）
- ②みせテクネ
実施日：10月～2026年1月末
場所：新郷小学校（まぜテクネ）

子ども・学生・若手クリエイターがテクノロジーやアートを通して自己表現し、地域とつながるイベント「CREATIVE PARADISE」の開催を目指し準備を進めた。作品展示販売や体験ワークショップ、ステージ発表を企画し、「好き」を仕事につなげる可能性を提示した。当日は大雪の影響で中止となったが、準備過程を通じて参加予定者の主体性や挑戦意欲を育む機会となった。

担い手の声

大雪により中止判断を行ったが、準備過程を通して若手クリエイターや子どもたちが主体的に挑戦する姿が多く見られました。また、県内企業と都心の大手企業の双方から協賛や機材提供の申し出があり、地域のクリエイティブ文化への期待と広がりを実感しました。今年の学びを踏まえ、2026年5月にハピテラスにてリベンジ開催を予定するとともに、継続的な発信の場としてネットショップ「クリパラマーケット」を開設し、通年型の展開へと発展させていきたいと思っています。

担当者の声

狭い世界で時に生きづらさを抱える若者たち。彼らが安心して自身の想いを表現し形にできる場で、その作品を世に出すのは初の試みでした。優しくも熱量をもって準備されていく過程で、各人にすでに多くの

発見や気づきが芽生えていたのではないのでしょうか。表現者として改めて社会と繋がったとき、どのような変化が起きるのか…世代を越えた取り組みに今後も期待しています。



横町編集部

おくえつ民話の創作 地方から言い伝える人口減少社会時代の文化創造

地域固有のコンテンツである民話には「その土地の人と自然・社会と民話の相互関係」を顕す味わい深く貴重な文化的資源が数多く眠っている。本事業は、民話を核とした事業を実施することで、地域文化の再発見、継承、発信を通じた文化創造を目的とする。大野の印刷・編集室などを拠点に、地域を題材とした民話を複数のワークショップで制作し、完成作を「みんなのみんなわ博」で発表する。

担い手の声

地元の民話を知り、新しい民話を創作するワークショップでは、先人たちが語り継いできた背景へのリスペクトも育まれました。当初は物語の創作にハードルを感じていた参加者も、次第にその面白さを実感していく様子が印象的でした。長年、活動されている地元の方の協力も得られ、地域内での意識の変化も生まれています。「みんなのみんなわ博」では、市外・県外からの来訪もあり、民話が地域を知る入口となると感じました。今後は、創作民話の冊子化や既存民話の継続的な調査、より多様な参加者が関われる企画づくりを進めたいと思います。

担当者の声

超高齢化、空家問題が目前に迫る大野市において、20～30代の担い手を中心となって地域の「民話」をキーワードに始まったプロジェクト。その土地に眠る魅力やストーリーを掘り起こし、共有し、新たな創



第2回目のワークショップにて、乾孝子さん（元大野市図書館館長）による民話の語りを聞いている様子

- ①民話ワークショップ
実施日：6～9月まで月1回（計4回）
場所：大野の印刷・編集室など（※7月のみ別会場で開催）
- ②みんなのみんなわ博
実施日：12月20日
メイン会場：平成大野屋 平蔵
ワークショップ会場：横町スタジオ、COCONO アートプレイス
トークイベント会場：大野の印刷・編集室など

作に繋げていく。立ち上げ1年目の最終発表のイベントでは、大野市の各所をうまく使って、まち全体を巻き込む仕掛けは圧巻！これからの発展に期待が高まります。



うたのおくりもの実行委員会

今川節作品アーカイブプロジェクト
～坂井市の音楽文化を未来へ～

坂井市丸岡出身の作曲家・今川節の楽曲を、県内外へ広く普及させることを目的とする。演奏の模様を動画サイト等へアーカイブ化して公開するほか、ゆかりの地でのコンサート開催、教育機関と連携した子ども向けボランティア演奏会などを実施。生の音楽に触れる機会を創出することで、地域文化の発信と継承に取り組む。

担い手の声

今川節の作品についての活動は一過性の企画としてではなく、継続的に育てていく価値のある取り組みであることを強く実感しました。今後は、演奏活動だけでなく、今川節の作品の解説や記録、発信（学校公演の増加など）を組み合わせ、地域の子どもたちとも共有できる方法を探っていくことで、より立体的な継承を目指していきたいと思っています。

担当者の声

坂井市にゆかりのある今川節にスポットを当てて、その作品をより多くの人に知ってほしいとの思いから始まったプロジェクト。コンサート当日は、坂井市や福井に深い繋がりのある音楽家によるパフォーマ



今川節ゆかりの緑幼稚園でのボランティア演奏の様子

- ①ふたつのペチカコンサート
実施日：10月24日、25日
場所：旧森田銀行
- ②緑幼稚園にてミニコンサートと園児の皆さんとの交流
実施日：10月28日
場所：緑幼稚園校舎

ンスが行われ、観客も聴き入っていました。地域ゆかりの音楽家の存在と作品が後世にも長く伝わり、地元の皆さんに親しみやすく残っていくよう、応援しています。



越前朝倉戦国まつり実行委員会

第55回 越前朝倉戦国まつり



朝倉隊、浅井隊等による合同出陣（時代行列）

第55回越前朝倉戦国まつり
実施日：8月23日、8月24日
場所：一乗谷朝倉氏遺跡一帯
来訪者：約35,000人

朝倉氏遺跡一帯において、戦国時代を再現すると共に、夜には約15,000個の蠟燭を点灯させ、幻想的な趣もあり、本県の新しい文化歴史の創造と、特色ある観光事業を創設した。

担い手の声

本まつりを通じて、国の特別史跡、特別名勝、重要文化財の三重指定を受けている、この一乗谷朝倉氏遺跡を、観光地としてのイメージアップを図ることが出来ました。今後も地元の様々な団体との連携を進め、地元住民と次世代を担う子ども達も巻き込みながら国内外へのアピールも実施し、更なる大勢の集客に取り組んでいきたいです。

担当者の声

地元の自治会メンバーを中心に企画運営してきた長い歴史を持つお祭り。観光客と地元住民のそれぞれの期待に応える企画も取り入れながら続けていることに意義があると感じました。今後は観光事業とし

ての側面に加え、朝倉氏遺跡の知られていない魅力の発信や地区に住む子どもたちへの歴史の伝承などにも繋がる活動にも期待しています。

カンケイ商店

未来に伝えたい福井の伝統 ～つくる・つかう、漆器の知育授業～

地元の子供たちに漆器を通じた知育プログラムを提供し、伝統産業の価値を身近に体験できる機会を創出する。令和6年度に実施した知育活動の継続版として、市内の保育園・学校を対象に拡充し、漆器の魅力や活用法・作り方を伝える授業や体験ワークショップを開催。地域住民や職人と連携しながら、次世代に向けた伝統産業の普及啓発を推進する。

担い手の声

体験では、子どもたちが本物の刷毛と漆に触れ、「意外と難しい…」「面白い」など、目を輝かせながら作業に没頭する場面が多く見られました。鯖江から招いた塗師と地元木地師が同じ教室で子どもに教える光景は、産地内の横連携としても意義深いと感じています。当日の様子は地元メディアにも取り上げていただき、少しずつ認知が広がるとともに、作り手・使い手共に意識が向上している手ごたえがあります。今後は深刻化する作り手不足に向き合い、若手職人の育成・技術継承へと活動を拡張していきたいです。

担当者の声

古くより漆器を支え続けてきた、大野市の木地師の熱い思いによって叶えられた、「自ら塗った漆器で食事をする体験」は、市内の子どもたちに体感として残ることでしょう。初めて木地に対峙したはずの子ども



上庄小学校での漆塗り体験の様子

鯖江市から現役の塗師さんを講師としてお招きし、本物の木地・漆・刷毛を使って越前漆器の漆塗り体験を実施。

実施日：12月9日
場所：篠座こども園、上庄小学校

たちが、自然と真剣な眼差しで集中している姿に、大人たちは驚き、感動させられました。県が誇る伝統工芸に「使う」以外の方法で県民が親しむ取り組みの重要性を感じます。

きらりアート展実行委員会

第16回 きらりアート展



第16回きらりアート展（パレア若狭）

①作品公募や事業の周知（5～9月）
②表彰および展覧会・巡回展
表彰式：10月25日
巡回展会場：パレア若狭（10/16～10/27）、美浜なぎあす（11/11～11/19）、熊川宿若狭美術館（11/22～1/12）、県立美術館（1/24～2/3）、ネットヨタ福井（2/10～2/24）

若狭町で開催している、福井県障がい者アート作品の公募展。障がい児・者の芸術的才能を発掘し、生きがいづくりに努め、併せて地域住民に感動を与え、かかやきとやさしさのある共生社会の実現を目指す。16回目を迎え、作り手の意欲の喚起や応募作品の充実とともに、地域社会の障がい者理解にも寄与してきた。

担い手の声

絵画、書、織物等計175点の応募があり、専門家の審査により入賞作品を50点選出しました。表彰式では誇らしい様子で楯を受け取り、作品前で写真を撮る姿が見られました。年々作家の力量が向上しており、本展開催の効果を感じています。パレア若狭ではハート&アートフェスタの2日間を中心に多くの来場者が訪れ、案内状を見て来た方も多くいらっしゃいました。「すごい、感動した」「心が洗われた」との感想をいただくなど、障がい者アートの素晴らしさを知らせるよい機会になりました。今後も継続・発展していきたいです。

担当者の声

障がいのある方や、子どもたちの作品を県内の様々な場所で巡回して展示することにより、県民の目に触れる機会が増えています。障がいのあるアーティストや子どもたちにとって自分が表現したものが展

示・表彰されることで生きがいや生活の励みに繋がる取り組みだと感じます。異なった背景を持つ子どもたちが、作品と一緒に取り組む方法はないかなと妄想します。

源氏物語アカデミー委員会

第36回 源氏物語アカデミー

『源氏物語』の作者である紫式部が、越前に滞在していたこと歴史的意義、また文化的価値を広く県内外の人々に伝える。

『源氏物語』と紫式部について、様々な角度から講義や公演、平安時代の食の再現、展示を実施することにより、福井の豊かな歴史や文化、伝統産業を全国から訪れる参加者に向けてアピールする。

担い手の声

今回で36回目となる当事業は、『源氏物語』に関する講義を聞くだけでなく、現地で様々な体験をしていただくことを目的としました。今回は和紙の里の見学や「かな書」の体験を行いました。地域の皆さんを対象に公開講座を実施し、紫式部が滞在した郷土について考える機会となりました。『源氏物語』に興味を持った方が、誰でも気軽に参加できるプロジェクトの在り方を考えていきたいと思っています。

担当者の声

30年以上続いている源氏物語アカデミー。源氏物語を切り口に、越前という土地の魅力や歴史を現地で体験してもらうために、毎年様々な角度からアカデミーの内容を考えるには、その裏で土地のことや歴



講義「史実と虚構～道長と紫式部～」同志社女子大学名誉教授 脇谷壽氏

第36回源氏物語アカデミー
実施日：10月17日～19日
場所：ホテルクラウンヒルズ武生ほか

史についての想いや勉強をされていることが想像されます。参加者＝ファンも等しく年を重ね、二世代で参加することもあると聞き、地道な活動の成果を感じます。

「うら(裏)」から始まる、私たちの場所づくり

河野ローカルミュージアム

田上夏伊さん

福井県南越前町にある漁業の村、河野。田上夏伊さんは、人口約1000人のこの集落を舞台に、地域全体を一つの屋根のない博物館「エコ・ミュージアム」と見立てて奮闘している。建築士として活動するかたわら、ガイドブックを発行し、まち歩きイベントを開催するなど精力的に活動する田上さんを突き動かしているのは、「地域を語る文化を育てたい」という熱い思いだ。

住民自らが地域を語る文化を育てたい

私が南越前町に関わるようになったきっかけは、地域おこし協力隊です。福井市出身で、高校まで福井で過ごした後、横浜の大学に進学して建築を学びました。大学院にも進んだ後、福井に戻るという選択肢を検討し始めた頃に地域おこし協力隊という制度を知りました。すでに大きなまちおこしの動きが生まれている場所より、何か企画したら良くも悪くも反応がダイレクトに返ってくる場所でゼロから自分ごととして関われる環境に身を置いてみたかったのです。大学院時代に研究していたエコ・ミュージアムの考え方も、ここなら実践として試せるのではないかと感じました。

着任後は、まずこの地域を知ろうと、街を歩き、人に会い、話を聞くことを繰り返しました。関係性を築くにつれて、住民の方々の暮らしや大切にしていることも少しずつ見えてきたのですが、「自分だけがこれを知っているのはもったいない」と感じ、友人を一人、また一人と連れて歩くようになりました。そこから自然発生的に始まったのが、住民自身に生活圏内を案内してもらいながら、地元ならではの魅力や歴史を体験するまち歩きです。住民たちは皆、最初は「こんなところには何もない」「何を話せばいいのか」と嫌がります。それでも、いざ歩き始めると言葉があふれ、ガイドとしての経験が少ない「ズブの素人」であるはずの彼らが雄弁な案内人になるのです。長く暮らしてきたからこそ滲み出る地元への愛着や、何気ない日常の記憶が自然と語られていく瞬間に立ち会うたびに、「地域を語る文化」を育てたいとの思いが強くなりました。3年間の任期が終わるタイミングで、活動の集大成としてローカルガイドブック『うらのこのうの』を制作しました。全24ページのフリーペーパーです。名前には、二つの意味を込めました。一つは、観光として整えられた“表”に対する、生活者の視点から見た“裏”。もう一つは、方言で“自分”“私たち”という意味の“うら”です。この漁村集落には、例えば北前船のように、外から評価される歴史がある一方、住民にとっては当たり前すぎて語られない魅力的な風景もたくさんあります。住民に

ガイドしてもらったからこそ知った彼らが誇る日々の憩いの場や日常の景色を詰め込みました。時間をかけてじわじわと伝わり、地域の人にも手に取ってもらえる冊子には、ウェブの即時性とは違う強さがあると考えています。

住まずに関わる地域づくりモデルの実践

2024年3月に協力隊の任期を終えてからは、任意団体「うらのこのうの」として活動を継続しています。ローカルガイドブック『うらのこのうの』は2025年8月に2号目を発刊しました。当初、「南越前まち歩き」として実施していたまち歩きは、「のこのこのこのうの」と名前を変え、協力隊時代から通算すると18回、開催しました。参加者は、延べ100人を超えます。参加者に面白いと思ったことや心が動いたものを写真に撮ってもらい、住民に共有してもらおうと視点の交換にもなります。

大学で建築を学び始めた頃の私は、建築とは建物をつくることだと単純に思っていたのですが、建築とは人がどんな環境の中で、どんな感覚で生きているかを読み解く行為なのだと考えるようになりました。特に強く共感しているのが、和辻哲郎の「風土」という考え方です。気候や地形、自然環境が人の暮らし方や気質に影響し、同時に人の営みがまた風景や文化を形づくっていく。その相互作用の積み重ねが、その土地ならではの「らしさ」になるという考え方は、南越前町でも日常のいたるところで見受けられました。

任期を終えた後、私は河野に住まずに関わり続けるという選択をしましたが、私と住民の方々との関係は、むしろ深まっていると感じます。住まないからこそその距離感や、もう一つの生業である建築の視点から、河野をもう一度見直したいと思っています。決して採算が取れる活動ではありませんが、「小さくても続けること」を何よりも大切に、これからも「裏」から見える風景を丁寧にすくい取りながら河野とともに歩き続けます。



(たがみ・かい) 1996年福井市生まれ。横浜国立大学理工学部建築学科卒業。同大学院修了。2021年より南越前町地域おこし協力隊として活動開始。2024年にローカルガイドブック「うらのこのうの01」を発刊。県内の建築設計事務所で勤務しながら活動続ける。

南越前町 ● 地域の魅力向上支援 ● 活動基盤強化枠

現代芸術研究会

上牧谷ギャラリー・アートプロジェクト



ハスの葉をキャンバスにして子ども達が蓮の花の絵を描くワークショップ

- ①ハスの葉のハスの花を描くワークショップと展示
実施日：9月17日
場所：道の駅南えちぜん山海里研究室、南越前文化会館ギャラリー
- ②山本圭吾 追悼展
実施日：12月7日～21日
場所：上牧谷ギャラリー
7日にWEBトークセッション「〈記録と再生〉ー山本圭吾の思想とメディア芸術アーカイブの現在」を開催

担当者の声

自然豊かな上牧谷で、古民家を地域に根付いた美術館として機能させるため、様々な作家の展覧会やワークショップを開催されてきました。福井出身の作家・山本圭吾の追悼展では、参加者は畳の上に

北美やその後の現代美術、福井創美などの福井独自の文化運動を継承や発展、発表の場となることを目指す。北美関係の作家や若手の育成を目標とした個展の開催や、子どもに制作の場を提供し展示するなど、美術文化の発信と人づくりやひいてはまちづくりを目的として多くの展覧会などを開催した。

担い手の声

上牧谷ギャラリーを中心に松田菜美恵展、宇野昭夫展、松原三郎＋桑野泰成展、朝倉俊輔展、山本圭吾展を開催しました。大阪のスペース草より招待を受け朝倉俊輔・松原三郎二人展も開催しました。南条観光協会と共催でハスの花を描く子ども向けのワークショップと展示を開催しました。日独交流神和紙展や鯖江高校ギャラリー王山山本大廣展の共同開催、原宿外苑中学校での越前和紙漉きの体験学習との共催など、広がりを見せています。来年度は教育委員会と共催でハスの絵のコンクールも開催を計画しています。

座りながら、専門家と現地のゲストとの対話を聞き、作品を鑑賞し、山本さんの試みを体感できました。一見すると、こんなところにギャラリーが?!となるところも魅力的です。

若狭町 ● 地域の魅力向上支援 ● 活動基盤強化枠

心からコンサート実行委員会

心からコンサートプロジェクト

「日常に音楽を」というコンセプトのもと、すべての人が安心して生演奏に触れるコンサートを企画。上中駅やカフェ等の身近な場所で、月1回の無料ミニコンサートや出張型演奏などを開催した。気軽に音楽を楽しんでもらい、地域の人々の暮らしをより豊かにすることを目指している。

担い手の声

今年度、100回を迎えた心からコンサート。90回目となった「駅ピアノ祭り」ではJR小浜線上中駅の駅舎を会場にして、ピアノを主役としたコンサートや、地域に親しみのあるお店を中心としたマルシェを開催しました。雨の日にも関わらず400名を超える来場者数となりました。中でも今までの活動を応援したかったという方からボランティアスタッフへの応募があったり、クレームやゴミが全くなかった事からも地域の方からの認知度が上がってきたんだと思います。今後も音楽で場所や地域の活性化を図りたいと思っています。

担当者の声

上中駅の駅ピアノを用いた誰でも参加できるイベントをメインの事業として、その準備から当日の運営まで多くの人が関わっていました。当日はものすごい人数で、人混みの頭の隙間からパフォーマンスを見た



県内外の小学生やプロのピアニストが参加し、バラエティに富んだ演奏で盛り上げた駅ピアノ祭り

- ①駅ピアノ祭り
実施日：10月5日
場所：JR小浜線上中駅 2階ピアノ前広場
- ②歌の宅配便
実施日：毎月1～5回 30分程度
場所：鳥浜区サロンやデイサービス事業所等

ことを覚えています。これまでの地道な活動が実を結び、参加者のみならず地域の人にとっても、とっても楽しみのなっていたプロジェクトになっていますね。

映画で見つける、わたしの福井 — 対話する上映会プロジェクト



「シネマ ダイアログ ラボ」 イベントの様子

- ①「感じたこと」を話していい映画体験
実施日：12月17日
場所：そばに映像舎・あわい読書室
- ②少しでも自分の本音が言葉になる90分
実施日：12月22日、25日
場所：福井県立大学（永平寺キャンパス）

短編映画の上映と少人数での対話を組み合わせた「語る映画体験」。観る・話す・聴くという行為を通じて、福井で暮らす人々の気づきと交流を育む、対話中心の上映イベント。「映画を観て話す」という体験を通じて、人とつながる時間や感性の交換の場を提供したい。今後は若者を対話ファシリテーターとして迎え入れ、主体的に関われる環境を整えていくことも目指している。

担い手の声

活動を通して、映画を「観る体験」から「語り合う体験」へと広げる場が、地域や大学の中で少しずつ受け入れられている変化を感じています。上映後の対話では、参加者が自分の感じたことを大切にしながら他者の意見に耳を傾ける姿勢が生まれ、安心して本音を言葉にできる空気が育ちつつあります。今後は大学・地域団体・映像関係者をつなぐ継続的な連携体制を築き、文化振興と次世代の担い手育成の両面に貢献していきたいと考えています。

担当者の声

映画を観た後に、話しても話さなくてもいい安心感とともに、静かで穏やかな、時に笑いのある心地のよい経験。そのような時間と場所を作るために、主宰者でありファシリテーターの手島さんが心を砕いている

のも伝わってきて、それもまた心を打たれました。このような場が根付き、続いていくことは福井の文化を“味わう”基盤を考えるうえでも重要な活動だと感じます。



武生国際音楽祭2025

9月4日に開催したあいパーク今立でのコンサート
出演：小林あすき（ソプラノ）、松村多嘉代（ハープ）

- ①武生国際音楽祭2025サマーコンサート
実施日：7月23日
場所：ハーモニーホールふくい小ホール
- ②武生国際音楽祭2025アウトリーチコンサート
実施日：8月30日～9月7日
場所：越前市内各所（合計15回開催）

世界的作曲家の細川俊夫氏を音楽監督に迎え、1990年から続いているアーティスト滞在型の国際音楽祭。それに加えて越前市のまちなかでアウトリーチコンサートを行い、クラシックコンサートに馴染みのない市民層にも音楽を届ける。

担い手の声

越前市文化センター以外の会場でのアウトリーチコンサートを積極的に行いました。7月に実施したプレイベントでは、ハーモニーホールふくい小ホールを利用したことで、イベント運営に対する団体メンバーの意識が大きく高まりました。また、音楽祭期間中のまちなかコンサートも盛況であり、市民が生の音楽を求めていることが実感できました。今回新たに参加してくれたボランティアスタッフとの結束を深めながら、メンバーの強化に努めていきたいと思ひます。

担当者の声

平日のお昼にもかかわらず、多くの市民で賑わっており、プロのアーティストによる演奏は、鑑賞者の心を音楽で癒やし、空間全体に温かい時間が流れていました。一流の演奏を鑑賞する機会が都市部と比

べて少ない地方において、地元を思いながら地元の人に音楽を届ける役割を民間団体が担い、継続して実施している貴重な試みだと感じています。



ZEN AIR -Artist In Residence EIHEIJI

曹洞宗大本山永平寺を擁する「禅の里」永平寺町において、アートを通じ地域資源の再発見と発信を行う事業。アーティスト・地域リサーチャー向け短期滞在型プログラムの試行や、子ども向けの担い手育成講座を実施し、禅文化や地域資源と創造活動を接続する場づくりを行った。



ワークショップでの様子

担い手の声

本年度は次世代アーティストおよび地域の担い手育成を目的に、子ども向け企画を新たに実施しました。身近な素材や地域の廃材を活用した体験を通じ、アートへの心理的距離が縮まり、多世代に関わる機会が生まれました。地域資源を創造的に捉える視点が共有され、担い手候補との関係構築が進んだと感じます。今後は短期滞在型AIRの試行を継続し、地域参加型企画と連動させながら、継続的な拠点形成を進めたいと思います。

担当者の声

福井の廃材で効果音を作る体験は、子どもだけでなく大人も夢中になれる創造的な場でした。最初は戸惑っていた子でも、だんだん自信や意欲を高め、積極的になっていく姿が印象的でした。世代を超えた

交流や成功体験の積み重ねは、住民を地域文化の新たな語り手へと変えていくはず。新生ZEN AIRが多くのの人に長く愛され、町の誇りとして根付いていくことを願っています。



若手音楽家発掘プロジェクト

プロの生バンドによるコンサートを通じて、小中高・大学生から社会人まで幅広い世代が交流できる音楽イベント。地域活性化と音楽教育の普及を目的とし、トランペットの魅力を体感しながら学べる機会を提供する。プロの演奏体験を通して若手音楽家を発掘・育成し、地域の音楽活動の継続と発展、世代を超えた交流の場づくりを目指す。



2025年実施の合同演奏の様子

担い手の声

活動を重ねる中で、世代を超えた参加者同士のつながりが生まれ、地域に音楽を支える担い手の輪が広がってきました。学校・地域・保護者の協力も進み、音楽活動への理解と期待が高まっています。今年の成果を踏まえ、若手音楽家の育成機会をさらに充実させ、地域と連携した継続的な公演や交流の場を増やし、持続可能な音楽文化の定着と地域活性化を目指します。

担当者の声

小学生から60代までが「トランペット」を通じ、世代を超えて刺激を受け、高め合う姿が印象的でした。1つの楽器に特化した演奏会は稀で、観客にとっても貴重な体験です。舞台での出会いを機に「ボラン

ティア演奏に行こう」とデュオが誕生するなど、新たな繋がりも芽生えていました。今後、舞台の枠を超え、県民に開かれた活動として広がっていくことを期待しています。



日独交流神和紙展実行委員会

2025 日独交流神和紙展



ドイツ人作家を交えてのシンポジウム

- ①ドイツ人・日本人作家の展覧会
実施日：6月22日～29日
場所：武生公会堂記念館、卯立の工芸館
- ②越前和紙とアートの関係性を深めるシンポジウム
実施日：6月22日、29日
場所：武生公会堂記念館、卯立の工芸館

ドイツ人・日本人作家による越前和紙を使用した現代アート展覧会を通して、地元伝統文化・工芸と芸術や現代アートの普及や発展を図る。

またドイツ・日本人作家同士の交流はもとより、和紙製作関係者、行政機関、市民・県民の皆さんとの連携や交流も図る。さらには無形文化遺産に選ばれた越前和紙（神和紙）を、アート制作の素材としてより世界に広めていくと同時に、越前の地を和紙アートのメッカにすることも目的としている。

担い手の声

今年はドイツ人作家4名を招き、アート作品とともに作家同士や製造元、鑑賞者との交流を通して、越前和紙の素晴らしさや尊さをより深め、その普及・発展に努めることができました。また、越前和紙発祥の地にある卯立の工芸館と武生駅前にある公会堂記念館の2会場で同時開催することにより、鑑賞者に違うスタイルの2会場を楽しんでいただくとともに、伝統工芸の産地を広くアピールすることができました。来年度は、新たなドイツ人作家を招き、より一層越前和紙と現代アートの普及・発展に努めていきます。

担当者の声

越前和紙を架け橋に、ドイツ人作家と日本人作家が作品制作を行い、同時に展覧会を開催するプロジェクト。今年は二会場での実施を試み、作家それぞれの着眼点を通して生まれた個々の作品が建築と

調和する。また、観覧者と制作者が直接話せるプログラム作りや、対話型鑑賞も取り入れるなど新しい取り組みも素晴らしいですね。

福井映画祭実行委員会

福井映画祭2025

県内各地のロケ地で撮影を行った映画制作、および、本年度は、完成した長編映画や、県民に推薦したい招待作品の上映を行う福井映画祭を開催し、会場となった福井のミニシアター・メトロ劇場が満席となり、大きな注目を得た。制作した映画では、市民や県内企業が制作に参加。制作の過程では、参加者や関係者の間で交流と学びが生まれ、福井の風景や地域資源の魅力を再発見した。

担い手の声

映画制作・上映とコンペティションを隔年で実施しており、今年は映画制作と招待上映を行いました。映画制作にあたっては、県内企業や県民からロケーション提供や制作協力を得ることができ、地域全体で作品を支える体制が築かれました。こうした関わりを通じて、担い手の意識や地域の映画への関心も高まりつつあります。今後も、隔年開催している全国から多数の応募から映画作品を選出するコンペティションを軸に新たな才能を発掘しながら、「作る」と「観る」のサイクルを継続的に育み、地域に根ざした映画文化の発展を目指します。

担当者の声

日頃から見慣れた景色が、映画館のスクリーンに映ったとき、商業映画では感じたことのない不思議な感覚がありました。生まれ育った土地で物語を着想し、仲間と力を合わせて、よく知る土地で撮影された



映画『LOST LAND / ロストランド』の舞台挨拶

- ①自主制作映画「わーどおわー」の映画制作の準備及び撮影・編集
実施日：5月～11月
場所：主に福井市、あわら市でのロケーション撮影など
- ②福井映画祭2025
実施日：11月30日
場所：福井メトロ劇場

映画は、地元の人々の“日常”を再発見させる力があると感じます。制作から鑑賞まで、様々な形で関われる福井の映画文化がこれから広がっていくことを願っています。

福井コミュニティ・アーカイブ（仮称）

小さな記録を持ち寄って、



「小さな記録を持ち寄って、」上映会の様子

- ①上映会「小さな記録を持ち寄って、」
実施日：10月18日
場所：あわい読書室
参加人数：25名（参加者14名、スタッフ5名、映像提供者4名、メディア2名）
- ②アーカイブ展示・トーク「小さな記録を持ち寄って、」
実施日：2026年2月7日～15日
場所：わおん書房

「あわい読書室（福井市）」を拠点に、ホームムービーや写真、日記などの「小さな記録」を収集・保存。それらを活用した上映会や展示を通じ、記録の再生と対話から、個人の記憶や営みとの出会い直しと分かち合いの場を創出する。公的な歴史とは異なる個人の生活実感やライフストーリーを重視し、地域の人々の記憶を「再記録」し保存・共有する活動を展開することで、記憶の継承と新たな価値の発見を目指す。

担い手の声

「小さな記録」のアーカイブは単なる保存ではなく、記録の背後にある思い出や喪失感を含めた、過去の営みとの出会い直しの場であると再認識しました。個人的な記録であっても、他者と分かち合うことで価値が生まれるという手応えが、地域の方々や参加者などの関係者にも広まりつつあります。今後はあわい読書室での活動を軸に、「産声のアーカイブ」等の企画も展開。地域の人々の記憶を、残された記録に対するまなざしと共に残していく在り方の模索や営みの定着を目指していきます。

担当者の声

かつての福井のまちの記録や、他人のホームビデオの上映会に来ていた人は、自分たちがもつ記憶や感情と結びつけながら、その場に共感が生まれていました。撮影された方が映像を観ながら口にす

る当時の様子や撮影した時の想いは、「記録」した当人だからこそ湧き出てくる言葉ばかりで、聞いていると心が揺さぶられる不思議な体験でした。

福井商工会議所

福井のそばの新しいスタイルの食べ方と、特徴・文化や美味しさに関する普及啓発事業

そば、肴、地酒など、自慢の福井名物を一度に楽しめる飲食店を「SOBAR」として認定し、福井県内外に新たな食文化の提案を行う。福井県産そばの知名度向上と文化芸術の発信を行い、食とアートを同時に楽しめるイベントや、スタンプラリーを実施した。

担い手の声

「そばを楽しむ会」では、食を切り口として文化芸術と新たな層の接点を生み出すことができました。また、会場となった蕎麦屋の店主による、普段は聞けない“そば”の解説や、そば打ちを体験する機会を設けることで、県産そばへの理解を深めました。アートに触れるソバールスタンプラリーでは、県内外より多数応募があり、そばとアートを同時に楽しむ取り組みとして広く関心を集めることができました。今後は、県産そばと福井で文化芸術の分野で活躍する方とのコラボレーションを図る取り組みを考えています。

担当者の声

県民の郷土料理として親しまれている「越前そば」について、歴史的背景や他県のそばとの違い・特色、作る工程などについて学ぶことで、越前そばの魅力を深く理解するきっかけになっていたと感じまし



第1回そばを楽しむ会にて、葵亭真月（あおいてい しんげつ）氏による落語を楽しむ参加者

- ①そばを楽しむ会
実施日：10月9日、11月25日、12月7日
内容：店主によるそば解説や酒飯店担当者からの地酒解説により、学びながら食を楽しめる会を全3回開催。
- ②アートに触れるソバールスタンプラリー
実施日：12月5日～2026年1月12日
内容：県内のSOBAR認定40店舗にて開催。スタンプ台紙には県産そばの解説コラムと落語動画の二次元コードを掲載。

た。今後は事業を通して、越前そばが福井の生活文化の中でどんな立ち位置なのか、そばを様々な角度で県民と見つめていくような活動への広がりを期待したいです。

過去を保存し、現在と未来をつなぐ営み

小さな記録を持ち寄って、

丸山達也 さん

コタツの周りでくつろぐ子ども、地域のお祭り、晴れ着をま
とってはにかむ親子―。市井の人々のなにげない日常を記録
したフィルムや磁気テープ、写真などの小さな記録を収集し、
未来へ残すプロジェクトが小さな映像舎で始まっている。映
像作家の丸山達也さんは、県内に残る日常の記録を通して、
福井の今と未来を静かに見つめている。

「自分が何者か」答えられずに募った違和感

私は大阪で生まれ、福井で育ちました。大学進学を
機に大阪に出た後、名古屋・東京で映像作家として活動
していましたが、次第に「自分が何者か」という問いを
意識するようになりました。自分の「故郷」について考
えると、高校生までの私は地元に残り愛着を持ってい
たわけではなく、都会にはもっと面白い世界が広がっ
ていると思っていましたし、4歳まで大阪で過ごしたこ
とから、「自分は福井の人間ではない」という意識もあり
ました。県外で過ごす時間が長くなるにつれ、表現
を仕事にしている自分が自分を語れない感覚が違和感
となり積み重なっていきました。

「故郷」である福井を知りたいとの思いから、市民が
撮影した映像をアーカイブすることに着目しました。
きっかけになったのは地元に近い石川県加賀市での地
域おこし協力隊での経験。2021年8月から3年間、郷土
資料の収集と整理、保存、利活用に携わりました。図書
館や公民館に残っていた資料のほか、地元の人々にチ
ラシを配り、押し入れの奥に眠っている8ミリフィルム
などを借りて上映会を行うと、スクリーンに映し出さ
れる1970～80年代の加賀の風景に高齢者は懐かしそ
うに声を上げ、若者たちは新鮮な驚きとともに見入っ
ていました。アーカイブは見るだけでなく関わることで
初めて生きたものになると感じました。

その一方で、課題も感じました。アーカイブは忘れ
去られた瞬間にその価値を失うため、収集するだけで
なく、その存在を知ってもらう努力が必要ですが、一
人で両方を担うのは大変です。持続性や収益性をどう
確保すべきか考え続け、「場所を持つ」という答えにた
どり着きました。

こだわりの「そばに映像舎」を拠点に

2024年8月に加賀の活動を終えてからは、「そばに映
像舎」を拠点に福井の市民アーカイブに取り組んでい
ます。加賀の在任中に探し始めて購入した物件を改装し、
2025年5月にオープンしました。今の場所を選んだのは、
両手に田畑を見ながら進むとふっと出現する住宅エリ

アの一角という立地が、日常と非日常を行き来する場
所という意味でバランスが良いと感じたためです。

事務所を兼ねたスペースの「あわい読書室」では、
誰もが気軽に立ち寄ってコーヒーを飲み、本を読み、
物思いにふけりながら、ふと思い出したことや相談し
たいことがあったら、いつでも私たちに声をかけても
らうことができます。改装にあたっては、心ゆくまま
に自分自身の時間をお過ごしいただけるような距離感
と、記録や記憶が保管される場所としての空間的な美
しさを意識しました。私たちに小さな記録の相談をし
ようと思ってもらうためには、安心できる空間・時間が
必要だと考えたからです。これまでにデジタルとフィ
ルムを合わせて約650本が集まりました。持ってきて
くれるのは、何が映っているのか知りたいが家で再生
できないという人から、一人で見る勇気がなく、同じ
空間に誰かいてほしいという人までさまざまですが、
提供されたムービーを整理する際は、提供者の思い出
を聞き取りながら、必ず一緒に見ることにしています。
その時間は提供者の記憶に迷い込み、歩みや思いをた
どっている気がします。

今後は、「あわい読書室」で提供者の解説を聞きなが
らアーカイブ映像を鑑賞する会を定期的に開催し、昔
の福井を知る世代から子育て世代、古いメディア自体
が珍しい若者が集う場にしたいと考えています。さらに、
私と同じように各地に眠る地域の映像のアーカイブ化
に取り組んでいる人々との連携や、我が子と最初に出
会った時の記憶を夫婦が互いにインタビューし合いレ
コードに収める「産声プロジェクト」も構想しています。

アーカイブとは、過去を保存する行為であると同時に、
現在と未来をつなぐ営みです。福井をアーカイブする
ということは、私自身が福井を改めて知り、自分の足
元を見つめ直すということです。私はこれからも、福
井という土地に静かに耳を澄まし、その声をすくい上
げていきたいと思っています。



(まつやま・たつや) 映像作家。「記憶をひらく」をテーマにした滞在
空間「あわい読書室」の店主。2025年6月より、市井の人々が残した
小さな記録をアーカイブするプロジェクト「小さな記録を持ち寄って、」
を始める。

福井市

● 地域の魅力向上支援 ● 活動基盤強化枠

福井商工会議所青年部

ふくいのかみくら・伝説芸能まつり事業



ステージ発表の様子

福井フェニックスまつり
ふくいのかみくら・伝説芸能まつり事業
実施日：8月2日
場所：福井駅前電車通り

例年開催される、福井の夏の風物詩である「福井フェニッ
クスまつり」の福井駅前会場でステージを設け、福井の伝
統文化である無形民俗文化を継承・披露する6つの団体
を集め発表を行った。各無形民俗文化の披露に加え、それ
ぞれの歴史を解説するパネル展示も行い、福井の文化の
奥深い魅力を発信する。

担い手の声 事業実施により、当団体関係者ならびに来場者の
方々に福井の無形民俗文化の存在と魅力を伝えることが出来まし
た。県内外から来場された方々へのヒアリング調査では92%が「と
ても良い」との評価をいただきました。今後は当事業のように複数
地域の無形民俗文化が披露される催しが継続されるように支援活
動を工夫していきます。

担当者の声 普段はそれぞれの地域で活動している伝統芸能を一度に鑑賞すること
ができるお祭り。気軽に参加できるフェニックス祭りと併せて開催す
ることは伝統芸能を鑑賞する敷居を下げ、県民の皆さんが興味を
持つきっかけになっていると感じました。今後、鑑賞者から担い手に変
わる仕掛けづくりの取り組みもあれば楽しみにしています。



小浜市

● 地域の魅力向上支援 ● 活動基盤強化枠

嶺南地域映像文化醸成プロジェクト

小浜劇場(ハマ劇)再生・記憶の映画祭

閉館した「小浜劇場(ハマ劇)」を一日限定で復活させるア
ートプロジェクト。映像に興味を持つ学生など若い世代が、地域
の高齢者から当時の映画館の記憶を聞き取り、映像で残
す。その貴重な記録を共有し、イベントに来たお客さんと共
に、思い出の映画を鑑賞する。小浜のエリアに失われた映像
文化を再構築し、将来的には地元の映画館復活へとつなが
る世代間交流と地域活性化の第一歩となることを目指す。

担い手の声 かつて映画館を中心に賑わった商店街を知らない
学生たちが「生の証言」に触れると、自らの手で街を再始動させたい
という使命感を抱き始めたようでした。若者の問いかけに高齢者が
期待を寄せ、多世代が混ざり合い文化を繋ぐ手応えを得たことは大
きな成果です。今後は、放送部によるインタビュー映像の作品化とコ
ンクール挑戦、映画サークル主宰者による不定期上映会を支援しま
す。学生の自走する動きを軸に、映画祭やロケ参加を定例化し、若
者を中心に多世代が交流しながら「映画のまち・小浜」を形にする
仕組みを根付かせていきます。



プロに学び地域の方の証言を記録するワークショップの様子

- ①「若狭おばまキネマアーカイブ」のための聞き取り・
記録ワークショップ
実施日：10月22日
場所：はまぜプラザ
- ②小浜劇場(ハマ劇)再生・記憶の映画祭
実施日：11月22日
場所：旭座

担当者の声 かつて小浜市民に愛され数々の思い出を生んできた「ハマ劇」。そ
の記憶を呼び覚まし、また小浜市で映画を観る体験は、世代を超えて
心が通い合う1日となりました。当時を語る人生の先輩の生き生きとし
た表情を目の当たりにし、学生たちは土地の歴史や映画にまつわる
記憶に様々な思いを巡らせたのではないのでしょうか。この取り組みがこ
れからも小浜市民を繋いでいくことを期待しています。

若狭小浜ちりとて落語の会

第2回おばま学生落語まつり



第2回おばま学生落語まつり「第2回桂福丸杯全国学生落語選手権」決勝大会の受賞記念写真@旭座

- ①桂福丸の子供落語劇場&宿題カフェ
実施日：8月8日
場所：若州一滴文庫
- ②第2回桂福丸杯大学生落語選手権
実施日：8月23日～24日
場所：小浜市文化会館、旭座、はまかぜプラザなど

小学生から、大学生までの幅広い学生たちのエネルギーが集まる「おばま学生落語まつり」を開催。NHK朝ドラ「ちりとてちん」の放映をきっかけに、2007年より若狭地域で320回以上もの主催・共催・協力してきた寄席や落語会で、地域に根づきつつある落語を、地域の風土の一部として高めていくことで小浜市を活性化する。

担い手の声

学生の囃家のサインを集める新しい取り組み「サインラリー」を導入し、大学生と市民に参加してもらった結果、高校生のボランティア参加が増えたこともあって、コミュニケーションツールとして活用できました。その盛り上がりが伝わり、地元企業からの協力支援も増えています。今後、参加学生にはなるべく経費負担を減らしていく工夫を行い、市民には参加する学生との触れ合い、コミュニケーションを高めることに努力したいと思います。

担当者の声

全国から大学生100名超が集う賑わい。小学生や高校書道部など多世代が参加できる活動に、小浜市内の行政や企業だけでなく多くの市民に落語文化が広がっていくのを感じます。プロアマ問わず落

語家が集う小浜市で青春の1ページを彩った学生たちが、様々な形で小浜を支え発信していく存在になることを願っています。



わくにこ実行委員会

ひろってつくって、うみアート！ ～福井の海でまなぶ・つくる・ひろがる～



海ごみアート制作の様子

- ①ビーチクリーンの実施
実施日：7月6日
場所：福井市蒲生町 越廼海水浴場周辺
- ②海ごみアートづくり体験の実施
実施日：10月4日、5日
場所：わくわくにっこりロハスマーケット2025 会場

福井県内の海岸で、海洋ごみ問題をテーマにした体験型環境アートワークショップを実施した。親子で海ごみ拾いを行い、地域の海の現状や課題について学ぶ機会を設けた。10月には、拾った海ごみを素材としたアートづくり体験を、イベント「わくわくにっこりロハスマーケット」の会場にて実施し、来場者が楽しみながら環境問題に触れる場を創出した。

担い手の声

本事業を通して、環境問題を「難しい課題」ではなく、体験や表現を通じて楽しみながら関われるものとして捉える参加者の姿が見られました。また、様々な参加団体の多種多様な店舗が並ぶロハスマーケット会場での体験実施では、来場者や出店者を含む多くの地域住民に活動が共有され、環境への関心が広がる機会となりました。こうした取り組みを通じて、海や暮らしを身近に考えるきっかけが地域に生まれつつあります。今後は、学校や地域団体との連携を深め、環境とアートを結びつけた学びの場を継続的に展開していきたいです。

担当者の声

福井の宝である越前海岸。そこには拾いきれないほどの漂着物がある…この現実と向き合い、「作品」へ昇華させる体験を通じ、関わった方々は当たり前の生活を見つめ直すきっかけとなったのではないで

しょうか。金津創作の森と連携し、県内外から注目されるロハスマーケットやその周りで、さらなる共感と体験が広がっていくことを期待しています。



WAKU

ふくいときどき劇場

プロアマ問わず表現したい人が集まってゼロから演劇作品を創作し、上演する。その過程で自分たちやまちについて考え、対話を重ねることで、まちの魅力や自分自身について再発見する。そして、表現することのよろこびを味わう。



1月11日に実施した、「ふくいときどき劇場『THE 市民劇 I am...!』」公演時の集合写真

- ①ワークショップ形式の稽古
実施日：7月～2026年1月(毎月2回程)
場所：福井市や鯖江市、越前市などの公民館や文化施設
- ②成果発表公演
実施日：12月7日
場所：PLAYCE
実施日：2026年1月11日
場所：ハビリンホール

担い手の声

参加者の中からも、演劇に限らず、音楽など引き続き表現活動を継続していきたいという意思を示す方が何名かおり、表現の喜びが伝わったと推測できました。県内の演劇団体、施設、アーティストらと繋がれたことで、福井県内の表現活動事情を知ることができ関係を作ることができました。今後はさらに連携の芽を育てていきたいです。

担当者の声

演劇の専門性を持つ代表の小針さんが中心となって、県内各地でワークショップを行っているファシリテーターのばななさんをゲストに、演劇に関わりのなかった県民が演劇に挑戦。約半年のワークショップや

稽古、合宿を経て、練習を重ねた本番のパフォーマンスは圧巻でした。参加者の声から構成されるシナリオと、その過程を通して、参加した内側の変化や発見がたくさんあったことが舞台に現れていました。



FMRC 福井中世ルネサンスコンサート

合唱と楽器のコラボによる演奏

FMRCの声楽アンサンブルと古楽器アンサンブルグループとのコラボを通して、美しい旋律が特徴の中世ルネサンス期の音楽の芸術性の高さを一般市民、特に中高生など若い世代に広く興味を持ってもらい新しい世界観を感じてもらう為に公開講座や演奏会を開催する。



声楽とリコーダーアンサンブルとのコラボによる演奏会

担い手の声

公開練習に中高生が参加したことで、中世ルネサンス音楽に触れてもらえる機会になりました。数多くの音楽のジャンルがある中でも、中世ルネサンス音楽の演奏はマイナーな活動であるかもしれませんが、興味を持ってくれた学生にとっていい刺激になったと感じました。今後も広く、我々の活動を通してアンサンブルの良さを伝えたいです。

①公開練習・講座

実施日：10月30日、2026年3月7日
場所：福井県立音楽堂ハーモニーホールふくい 小ホール、福井大学アカデミーホール

②楽器アンサンブルを招いた演奏会

実施日：11月7日
場所：ハーモニーホールふくいホール

担当者の声

中世ルネサンス期の合唱を中心に、長年活動されてきたFMRCさんですが、今回は新たな挑戦として古楽器アンサンブルとのコラボレーションによるコンサートが実施されました。中世ルネサンス期の音楽

は、現代の合唱におけるハーモニーともまた違った独特の魅力や難しさがありますが、本番に向けて一生懸命準備を進めてらっしゃいました。



かわいニコニコ王国まちづくり協議会

1ら♡ぶ 河合「ニコニコ☆キラリン王国」事業



透明感あふれる優しい光が幻想的なペットボトルのキラリン城

- ①パーツ作りワークショップ
実施日：10月31日
場所：河合小学校
- ②キラリン城点灯式、クリスマスコンサート
実施日：12月6日
場所：河合公民館（大ホール・屋外）

子どもたちや地区の多くの住民が協働し、ペットボトルイルミネーション“光るお城”を制作。河合公民館の敷地内に高くそびえる”城”をシンボルに、まちのライトアップを実施。12月から2月にかけて「ニコニコ☆キラリン王国 冬まつり」を展開し、地域の賑わいと連帯を育んだ。点灯式には「ほっとキラリン王国」クリスマスコンサートを開催し、セレモニーを行い点灯した。

担い手の声

イルミネーションのモニュメント“光る城”制作では、7月から全地区へ呼びかけたペットボトル回収に予想を超える協力が集まり、地区全体で取り組む機運が高まりました。当初予定になかった小学校を使用してのワークショップでは、児童が“城”のパーツ制作を担い、まちづくり協議会が組み立てを行う世代連携が生まれました。今後は、次世代の担い手育成と地域一体型の活動を継続し、地域住民が参加する楽しいまちづくりへ発展させていきたいです。

担当者の声

今年度は近隣の小学校と連携してお城を作るためのペットボトルを組む作業を小学生たちと行っていました。その時点で既に来年度の展開を構想していたり、公民館の利用者の方々にペットボトル集めに

協力してもらったりと、地域の活動の中心である公民館を上手に利用したプロジェクトです。大がかりではないからこそ、地域の方々との日頃の交流が活発なことが伝わりました。



ちやまアート実行委員会

勝山の四季と素材をめぐるアートプロジェクト【秋冬編】



恐竜とアートの冬まつり 雪像ステゴサウルスの前で

- ①【秋編】越前大仏 秋のお散歩アート体験
実施日：11月8日
場所：越前大仏内 Ring Art Museum
- ②【冬編】恐竜とアートの冬まつり2026～冬の恐竜王国を呼び覚ませ～
実施日：2026年2月11日
場所：道の駅 恐竜溪谷かつやま

勝山市の山や川など四季折々の自然や美しい風景は、住民にとっては日常となりその魅力に気づきにくくなっている。本事業ではアート（表現）を通して勝山市の自然や文化資源を再発見し、その魅力を未来へ伝えていく。当日、アーティストと参加者が自分らしい表現を形にできるよう対話しながら創作をサポートした。

担い手の声

これまでは観光客の来場が多かったですが、今回は市役所の協力により市内小学校にチラシを配ることができたこともあり、地元の家族連れの参加が増えました。このことで「地元の人の勝山の魅力を再発見してほしい」という目的に一步近づけたのではないかと思います。また、冬の会場である道の駅では、若手育成として積極的に協力いただくことができ、より地元との連携が深まったように感じました。今後も継続していくにあたり、資金面での課題は残りますが、毎年開催することで地元根付いた活動としていきたいと考えています。

担当者の声

アーティストの視点をヒントに勝山の四季をアートで楽しむ体験は、市民には見慣れた日常が鮮やかに彩られ、市外の方には勝山の風景がより深く心に刻まれる体験となったのではないのでしょうか。市内

の子どもたちへの周知や施設との連携などの工夫もされていました。勝山を身近に感じさせてくれる活動が、今後も、より多くの方に響き広がっていくことを楽しみにしています。



近松の里づくり事業推進会議

和楽器&民謡&日本舞踊で地域の伝統産業・伝統文化発信事業

民謡（地元出身の戸田弓子さん）、和楽器集団「誉レ」（メンバー全員が県内出身）、日本舞踊（近松おどり保存会）のコラボレーションによるコンサートで丹南地域の伝統産業や伝統文化（石田縞、越前漆器、近松門左衛門）を発信。地区内の園児が戸田さんの歌で「近松ヨイヤッサ」を踊り、立待地区青少年育成協議会の協力によって会場に設置された竹灯籠が幻想的な雰囲気を醸し出した。

担い手の声

例年、近松おどり保存会はCDで「近松音頭」を、地区内の園児は「近松ヨイヤッサ」を踊りますが、今年度は戸田さんの歌や誉レの生演奏で踊ることができました。いつものCDとは違い、踊っている人も見ている人も新鮮な感覚で接することができました。青少年育成協議会による竹灯籠は、親子でワークショップを開催、近松まつりの会場に設置し点灯式を行うなど、若い世代の方々に会場に来ていただくきっかけとなりました。今後も、親子で参加できるような内容の企画の参考にしていきたいです。

担当者の声

実際に住民の皆さんが集まり、共に作業し、一つの大きなものをつくってみると参加するみなさんの気持ちが重なっていくような温かい時間が流れているのを感じました。立待地区には近松門左衛門を



立待地区青少年育成協議会を中心に製作した竹灯籠で幻想的な雰囲気を創出した“誉レ”のミニコンサート

- ①竹灯籠ワークショップ
実施日：7月から2月2回程度
場所：立待公民館など
- ②コラボレーションコンサート
実施日：10月4日
場所：立待公民館講堂

始めとする稀有な文化資源が多く存在します。活動を通じて、日常の当たり前の風景が少し違って見える経験が広がっていくことを期待しています。



トレモロ

越前おおのめいりんオペラ塾

大野市の中心市街地にある「めいりん」を拠点に、街の賑わいを起こすとともに、オペラの美しさと楽しさを市民に提供することを目的として、専門家の指導のもと音楽と美術のワークショップを開催し、その成果を用いて、エンターテインメントあふれる演出によるオペラ舞台を行う。同時に、アート作家による作品を展示する。

担い手の声

メンバーやゲストだけではなく、ボランティアとして舞台設営等を手伝ってくださる方や、大道具制作のサポートとして民間事業者のサカエ広告さんのご協力をいただき、七間通りの市駐車場に面した社屋を使って、開かれたワークショップを開催することができました。今後は、市内のショッピングセンターでのまちかどライブのように、気軽な場所でもオペラを鑑賞いただくなど、地域を始め、学生も参加できるような活動を模索したいと考えています。

担当者の声

大道具作りの一部を担うワークショップには、大野市の中高生も参加していました。未来のオペラ、演劇、音楽などを支える人になり得る子どもたちが、ここで初めてオペラや演劇に触れる数少ない貴重な機会です。本番の公演中は「がんばれ!」と客席から声援が上がっていました。長年続き、地域の方に浸透している活動の力強さと熱



オペラ「森は生きている」より、森へ向かう女王たち

- ①ワークショップ（歌、大道具づくり）
実施日：歌 5月～毎月6回、大道具 10月5日
場所：めいりん講堂ステージ、サカエ広告社屋など
- ②記念コンサート
実施日：11月30日
場所：学びの里めいりん講堂

な機会です。本番の公演中は「がんばれ!」と客席から声援が上がっていました。長年続き、地域の方に浸透している活動の力強さと熱



福井市文化協会

第2回ふくいまちなかチャレンジ・アート



福井市民憲章を揮毫

- ① 絵画・工芸・書道のワークショップ
実施日：9月5日、6日
場所：AOSSA1階 アトリウム
- ② 書道パフォーマンス
実施日：9月7日
場所：AOSSA1階アトリウム

9月5日から7日まで、福井駅東口アオッサ1階アトリウムにて美術展（絵画・工芸・書道・写真）を開催し、市民に広く公開した。期間中は、アーティスト指導による体験活動を行い、文化活動の担い手育成を図った。最終日には、全長15mの懸垂幕を揮毫・展示し、福井の文化と魅力を市民および来訪者に発信した。

担い手の声

本事業を通じ、団体内では分野を越えた連携や企画意識が高まり、表現方法や運営面において新たな挑戦への意欲が見られた。地域においては、体験活動や公開制作を通じて芸術への関心が広がり、次回事業への参加意欲を示す声も多く聞かれました。今年得られた成果と課題を踏まえ、今後は他団体や異分野との協働を進めるとともに、企画体制の強化を図り、次世代の担い手育成と持続的な文化発信につなげていきます。

担当者の声

アーティストの作品展示に加え、ワークショップやライブパフォーマンスで出来上がったものを鑑賞するだけでなく、自身で実際に手を動かして作ってみたい、作品が出来上がるまでの過程を見たり体験すること

で、作品の見方が変わる経験は貴重な機会だと感じます。様々なジャンルの文化活動団体とのつながりを有する文化協会としての強みが、今後さらに生活かされる活動にも期待します。

ブレーメン2020

「もうひとつの名前」を持つお城たち…

メンバーは70才以上4人の福井出身のアマチュア音楽グループ。年に2～3回、公民館やアオッサ県民ホール等の舞台上に立ち、ピアノ、フルート、ギターと浪曲、ときに太鼓隊も出演する。音楽歴を生かし、施設慰問では、地域の歴史を歌詞にした自作の歌などを披露。本事業では、福井城がかつて「葵城」と呼ばれていた歴史を、まずは県民の皆さんに発信し、広めるため、講演会と演奏会を合わせた企画を実施した。

担い手の声

福井城の「葵（あおい）城」と同じように別の愛称を持つ仙台城の歴史に詳しい郷土史家もお招きしてイベントを開催しました。専門的な視点から歴史的な背景や状況を解説をしていたのち、後半は福井城の名前にちなみ作成したオリジナル曲を演奏するなど、福井のあまり知られていない歴史を、音楽を通じて親しみやすく学ぶ機会になりました。

担当者の声

福井城＝葵城という呼び名に関する資料が十分に残っていない中で、地道に調査され、この呼び名に関する歴史的な価値を発信、普及する取り組みに、自分たちが伝えていかなければ残らないかもしれな



「もうひとつの名前」…仙台のプラ木村氏が青葉城／仙台城、葵城／福井城の別称を語る

「もうひとつの名前」を持つお城たち

- 実施日：8月31日
- 場所：アオッサ8階 県民ホール
- 内容：講演会「伊達政宗公の城づくり」
歴史語り部「弾き語り」フォークコンサートなど

い、という強い思いを感じます。その使命感の元、今後も文献や語りだけではなくアプローチを試行していく活動が楽しみです。

今を生きる私たちがつくる、これからの民話

おくえつ民話の創作

木村有希さん 山本響さん 佐藤実紀代さん

自然への畏敬を背景にいつしか立ち上がり、世代を超えて受け継がれる地域特有の物語——。そんな民話をアーティストと協働しながら自分たちで紡ぎ、大野の新たな文化をつくろうと動き出した人たちがいる。「みんなのみんな」チームの木村有希さん、山本響さん、佐藤実紀代さんは、時に迷いながらも、謙虚に、丁寧に、そして楽しみながら、その活動に取り組んでいる。

語り部や作家、イラストレーターとともに
丁寧に重ねた4回のワークショップ

このプロジェクトは、大野市と関西大学の連携事業で開設された「横町スタジオ」を運営する横町編集部を母体に、「みんなのみんな」チームが中心となって進めています。大野という土地に根づく民話を聞き、味わい、向き合いながら自分たちの手で新しい民話を紡ぐことで、新たな担い手を育成することを目指しています。

発端は2024年12月に美濃街道をリサーチした際、大野の民話をまとめた一冊の本に出会ったことです。民話には実在する地名や通り、風景が登場します。土地に根差した物語である点が最大の魅力だと思います。

具体的な活動としては、ワークショップを4回開きました。2025年6月に開いた1回目のワークショップのテーマは、「街の中で民話に触れる時間」。約20人が集まって輪になって座り、語り部の坪川祥子さんの声に耳を傾けるというシンプルな時間でしたが、一人一人が想像力を総動員して頭の中で物語を立ち上げていくなかで、「五感で聞く」体験をしました。語り始める前にろうそくに火を灯し、語り終わると吹き消すという小さな儀式によって現実の時間と物語の世界が静かに切り替わり、「もっと聴きたい」という気持ちが湧いてきました。

翌7月に開いた2回目のテーマは、「山の中で大野の民話を聞く時間」。山あいの古民家で川の音や木々の匂いに包まれて窓から差し込む光を見ていると、民話が生まれた環境が体感でき、大野図書館の元館長で昔話に詳しい乾孝子さんの語りが一層、立体感を帯びるようでした。「アブ」というモチーフが生まれたのも、この時です。古民家に迷い込んだ一匹のアブの羽音を鎮めるために麦わら帽子が被せられ、終わってから放たれた後、「あのアブ、話を聞いていたのかな」という誰かの一言で場の空気が一変したのです。出来事から自然に立ち上がる物語。「民話に向き合う姿勢とはこういうことかもしれない」と、皆が感じる時間でした。

続く8月の3回目のテーマは、「街を歩いて、おはなしをつくってみよう！」。再び街中に集まった参加者は、作家の箔塔落さんから物語作りの基礎について手ほど

きを受け、大野の街を歩きながらモチーフを探索した後は、目に留まった風景や違和感を手がかりに、一気に書き上げました。その後、順番に読み上げた時に書き言葉が語り言葉に変わるのも印象的でした。

9月に開いた4回目は「おはなしを絵にしてみよう！」をテーマに、イラストレーターのおとしぶみさんの指導を受けながら、3回目で作った物語に挿絵を描きました。文字では述べられていない大きさや距離、表情などが線や色で表現されていきます。古民家に迷い込んだアブが大野城を背によろよと山へ帰っていく絵には、アブをモチーフに生まれた物語を受け取った感覚が宿っていました。

大野から生まれる現代版の「うそっこ話」

とはいえ、当初は、長い時間をかけて受け継がれてきた民話を私たちが新たに作っていいのだろうかという迷いもありました。しかし、この1年の活動を通して初めて物語を書いた参加者も民話は過去の遺産ではなく、語り継ぐことで生き続けるのだと思うようになりました。また、乾さんの「昔話はうそっこ話」という言葉で民話が身近に感じられたのですが、次第に大野でその現代版を作ってもいいんだと思えるようになりました。

今後は、子どもたちともおはなしをつくること。自分たちがつくった民話を語り部に聞いてもらうこと。ZINEを制作すること。白山信仰や地域の研究を深めることなど、構想はふくらみます。

私たちはもう民話の世界に一方的に耳を傾けているだけの存在ではありません。敬意をもってお辞儀をし、耳を澄まし、そっと語り始める——。その繰り返しの先に、きっとこれからの民話が生まれていくのだと思います。



（きむら・ゆき）福井県大野市出身。神戸大学在学中にイラストレーターとして活動を始め、企画・編集会社での勤務を経て、2024年に独立。イラストや取材執筆に携わる。
（さとう・みきよ）HOSHIDO店主。福井市出身大野市在住。金沢大学卒。書店、デザイン事務所勤務を経て双子の出産を機に独立。書籍編集などに携わる。
（やまもと・ひびき）神奈川県出身。2023年から大野市地域おこし協力隊として活動を始める。空き家を改修して、印刷と編集のスタジオ「大野の印刷・編集室 みなと」を2023年から運営する。



福井のまちに文化の種をまく人たち 福井のアーツカウンシルが目指す「県民主体」の文化とは

文化は、とかく「特別な人たちのもの」だと思われがちです。舞台に立つ人、作品をつくる人、そして、鑑賞する人——。いつの間にか固定されてきたそんな前提をくつがえそうという挑戦が、福井県で始まりました。福井県は2024年4月に「福井県文化振興プラン」を策定し、「みんなでつくる文化でつながる人と地域が輝く福井」を基本理念に掲げました。その実行を現場で支える新たな組織として立ち上げられたのが、アーツカウンシル機能を持つふくい文化創造センターです。

「誰かがやるもの」「鑑賞するもの」だった文化を、「自らつくり、動かすもの」へ。そんな変革に挑む福井のアーツカウンシルの役割とこれからの可能性について、「福井県文化振興プラン」では策定委員会の委員長として尽力した朝倉先生に聞きました。

「鑑賞するもの」を超えて「つくるもの」へ

——文化振興プランの策定に向けた議論をどう振り返りますか。

朝倉 プランの策定に向けた議論のなかで特に重視されたのは、これまでの「つくる人や、演じる人」と「鑑賞する人」という構図を超え、県民自身が企画し、身近な地域で文化の場を生み出す側になることでした。こうした県民主体の文化活動を広げていこうという発想は、これまでの計画にはあまりなかった狙いでした。

——プランの中で、アーツカウンシルはどのように位置づけられているのでしょうか。

朝倉 アーツカウンシルは各地にあります。それぞれに性格も体制も異なるため、組織を新たに立ち上げれば進み始めるというわけでもありません。福井の場合、新組織の呼称案がいくつか検討されましたが、議論を重ねるうちに、まずは福井に今、求められていることを見定めたいうえで必要な機能を持たせようということになり、プランには具体的な組織名を明記しないことで整理されました。その後、文化振興事業団の中に「ふくい文化創造センター」が設置され、アーツカウンシル部門が置かれることになりました。何もなかった数年前から、現在の活動にまで成長してきたその勢いには素晴らしいものを感じています。

花粉を運ぶ「ミツバチ」たちが広げる機運

——「アートプロジェクト」という言葉によってどんな変化が生まれたとお感じでしょうか。

朝倉 アーツカウンシルの仕事は、現場の実態を理解し、伸ばせる点は伸ばし、持続できる形と一緒に考えるという「伴走」支援こそが重要です。しかし、その負荷は決して小さくありません。一つ一つの助成先に寄り添おうとすると業務は果てしなく、彼らと同じように悩み始めると、到底、身が持たなくなります。それでも、「アートプロジェクト支援」が始まったことで、従来の助成のあり方は見直しが進んだと思います。

こうした制度変更の背景には、長年にわたり活動を続けている団体が優遇されがちだったこれまでの選考に対する問題意識があります。それぞれの活動が社会に対して

どんな意義を有しているのか表現できる取り組みにこそ光を当てるべきだという発想に変わりつつあるのです。

現在のアートプロジェクトの担い手たちは、地元の方々と県外から来た方々が半々程度です。これは、外部の新鮮なまなざしで福井を見て、「もったいない」「もっとできるはず」と感じる人であればあるほど、“新しいことを仕掛けたい”という思いにかられやすいためではないでしょうか。例えば、地域おこし協力隊のように、縦横に地域のネットワークを有し、フットワーク軽く移動して情報発信できる人材が、「花粉を運ぶミツバチ」のような動き方をしていると言えるでしょう。

——見えてきた課題はありますか。

朝倉 アーツカウンシルが主催するイベントの中で採択団体同士が年に2～3回集まる場が設けられ、刺激を与え合ったり、悩みを共有したりして新たなつながりが生まれつつあることは、とても好ましいと思いますが、仲間内だけで盛り上がり、つながりが閉じてしまわないように、出入り自由なコミュニティにしておくことが必要だと感じています。

また、打ち上げ花火のようにイベントを繰り返すことで、担い手が疲弊し、燃え尽きることがあってはなりません。イベントがゴールではなく、次にどうすれば持続していけるかを考える準備期間も活動だということを、関係者が認識することも重要です。特に、福井には法人化して活動を行う団体が少なく、活動の継続に必要な資金調達やマネジメントのノウハウが広がりにくいいため、助成金が切れた瞬間に活動が終わることが懸念されます。寄付を集めたり、イベントの参加費をとったりして応援を得る仕組みを考えたり、活動の価値の伝え方を支援したりする視点も必要だと思います。

——今後の期待についてお聞かせください。

朝倉 県民自身が、自分たちの手で地元をより良く変えることができると感じられるようになったり、自分はアートと縁遠いと思っている人が知らず知らずのうちにアートプロジェクトに巻き込まれ、当事者になっていたりする状況を作り出すことが、アーツカウンシルには求められていると思います。

その意味で、福井の文化芸術活動の未来を担う大きな役割が期待されていると言えるでしょう。ぜひ、頑張っていたきたいと思っていますし、私も芸術文化アドバイザーの一人として、尽力したいと思います。

(あさくら・ゆき) 公立小松大学国際文化交流学部准教授。福井市出身、在住。専門は文化政策。2017～2021年度文化庁地域文化創生本部研究官。福井県文化振興プラン策定委員長(2023年度)。現在、文化庁文化審議会文化政策部会臨時委員。文化経済学会(日本)理事長、日本文化政策学会理事。



文化で“幸福”を編み直す —福井のアーツカウンシルの静かな挑戦—

「幸福度日本一」を誇る福井県ですが、令和7年度の「福井県長期ビジョンの実現に向けた県民アンケート」では、幸福を重視する要素として「地域コミュニティとの関係」が6.1%、「地域の歴史や文化」は2.1%にとどまっています。暮らしの土台であるはずの地域文化やコミュニティとのつながりが、幸福の実感と十分に結びついていない現状が浮かび上がりました。この評価の陰で、文化を幸福の要素としていかに位置づけ直し、地域社会へ浸透させていくかが、いま問われています。

こうした状況下、令和6年4月に「みんなで創る 文化でつながる 人と地域が輝く福井」を掲げた「福井県文化振興プラン」が策定されました。このプランを実効性のあるものへと推進するために設立されたのが、「福井のアーツカウンシル(以下、福井AC)」です。

全国各地の先行事例に学びつつ、福井ACは後発ならではの機動力を活かし、地域に根差した支援のあり方を、柔軟に最適化しています。発足からわずか1年ではありますが、その歩みの特徴は大きく三つの視点から読み解くことができます。

特徴I. 地域に溶け込み「関係性を育てる」組織設計

福井ACの最大の特徴は、「アーツカウンシル」という名称をあえて前面に掲げなかった点です。公益財団法人福井県文化振興事業団の内部に「ふくい文化創造センター」を新設し、その一部門として機能させる形を採用しました。これは、新組織の事業が、長年地域を支えてきた文化芸術団体や伝統文化の軌跡を塗り替えるのではなく、むしろそれらと「地続き」であることを示すための選択だったと推察できます。従来の取り組みを否定するのではなく、その延長線上に新たな芽を育てていく。この継続性への敬意こそが、地域社会との信頼関係を第一に、地域固有の文化の蓄積を尊重しながら静かな変革を進めるという慎重な制度設計に繋がりました。これによって組織は地域に自然に入り込み、着実に機能し始めています。

特徴II. ジャッジを伴わない対話型「よろず相談所」の機能

二つ目の特徴は、地域における「よろず相談所」としての機能を果たしている点です。県が助成の募集と審査を担い、福井ACは審査主体にならない仕組みを採用しています。この分離により、福井ACは申請者にとって「ジャッジする側」ではなく、同じ目線で課題を共有する「相談相手」としての役割を担っています。相談件数は年間80件ほどにのぼり、今や多くの担い手にとって、文化活動の日ごろの悩みも含めて率直に現状を共有できる場になりつつあります。このような関係性をつくることで、文化活動環境や地域課題の深層にある課題や動向を把握し、それを踏まえた支援を通じて表現活動がのびのびと

展開できる土壌を育てています。

特徴III. 持続可能な「人材キャリア」と「経営基盤」の構築

三つ目の特徴は、将来を見据えた人材育成と運営基盤を構築している点です。地域文化の担い手に寄り添った伴走支援を始めるため、地域おこし協力隊を専門職人材として登用しています。現在は任期終了時期の異なる3名を受け入れており、令和8年度には任期終了後のスタッフを、5年任期付き職員として雇用することで、福井ACにおける人材のキャリアパスを段階的に形成しようとしています。また、福井AC職員の人件費に関わる予算構造にも工夫が見られ、人件費の一部を県が負担するなど、人材の定着と育成に向けて中長期的な視点に立った制度設計がなされている点は注目に値します。

加えて、全国一の社長輩出率を誇る福井県の特性を活かして、経済団体や企業とともに地元企業の文化活動の促進策を模索し、多様な主体が文化芸術に関わる基盤づくりを進めています。すなわち、文化を行政や芸術関係者だけのものにとどめるのではなく、地域社会全体で支える仕組みへと広げていくことが企図されています。

福井ACは、予算や雇用、企業連携など、持続可能性を見据えた組織の骨格を築いてきていますが、それは県の行政職員との「二人三脚」の積み重ねによって実現したものです。立場は違えど、互いの専門性を尊重し、共通の理想に向かって知恵を出し合う。この「信頼の共創」こそが、福井ACに関わる全ての人に求められる姿勢であり、組織を動かす礎となっています。

“文化の中で考えるのではなく、社会の中で文化のあり方を考える”。ディレクターの渡邊一孝氏が語るこの視座が、福井ACの真髄といえます。文化芸術を通じて「自分にとって幸福とは何か」を地域社会に問いかけ、県民一人ひとりがその答えを自ら問い続けるプロセスを支えることが福井ACの役割だと考えます。その地道な営みを継続していくことで、県民が地域文化に新たな価値を見だし、「幸福」という概念を自らの生活の中で捉え直す契機となるでしょう。

福井が「文化で輝く日本一幸福な県」となるために、対話と伴走を軸に人と文化の関係を耕していく福井ACのこれからの、深く期待を寄せています。

(みん・じんきょん) 韓国・ソウル生まれ、博士(学術)。専門は文化政策学。北海道教育大学岩見沢校准教授。フィールドワークを何より重視し、全国のアーツカウンシルをくまなく歩き、現場の声に基づいた研究を志す。日本文化政策学会理事長。令和2年度北海道文化財団アート選奨受賞。



福井のアーツカウンシルのこれから 「文化芸術ミーティング2025」パネルディスカッション

2025年12月14日、福井県内で文化芸術活動に関わる担い手や行政関係者、専門家が一堂に会する「文化芸術ミーティング2025」が開催されました。(公財)福井県文化振興事業団の主催で開かれたこのミーティングは、今年度同事業団内に「ふくい文化創造センター」を設置し、アーツカウンシル機能を備えた組織として本格的に動き出してから初めて開かれたもの。当日は2部構成で進められ、第1部では福井県がアートプロジェクトへの助成を本格化し、金銭支援にとどまらず「伴走支援」へと舵を切ってきた道のりと成果や課題について、「湊ノ芸術祭」や「うらのこうの」といったアートプロジェクトの担い手たちの声とともに共有されました。ここでは、続く第2部でアーツカウンシルの可能性について多角的な視点から交わされた議論の要旨を採録します。

パネリスト(敬称略)

朝倉由希(あさくら・ゆき)公立小松大学国際文化交流学部准教授

福井市出身、在住。専門は文化政策。2017～2021年度文化庁地域文化創生本部研究官。福井県文化振興プラン策定委員長(2023年度)。現在、文化庁文化審議会文化政策部会臨時委員。文化経済学会(日本)理事長、日本文化政策学会理事。上地里佳(うえち・りか)沖縄アーツカウンシル チーフプログラムオフィサー

沖縄県宮古島市出身。大学院でアートプロジェクトの現場に携わったことを機に、2013年に東京アートポイント計画「三宅島大学」で、14年より富山県氷見市を拠点とするアートNPOヒミングで、アートプロジェクトの現場運営を担う。16年からはアーツカウンシル東京、21年より現職。

森司(もり・つかさ)アーツカウンシル東京 事業調整課長

水戸芸術館学芸員を経て、現職。2009年より「東京アートポイント計画」、2016年より「TURN」ディレクター。2022年からクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーを推進し「だれもが文化でつながる会議」などを企画担当する。

中川晴香(なかがわ・はるか)地域おこし協力隊／「さばえまつり」実行委員会

神奈川県出身、鯖江市在住。営業として6年間会社員を経験したのち、2024年に鯖江市地域おこし協力隊として着任。ミッションは地域イノベーション事業。さばえまつりや幻燈音楽祭など地域事業の企画運営を担当。

黒田光亮(ふくい文化創造センター長)

渡邊一孝(ふくい文化創造センター アーツカウンシル部門 ディレクター)

【司会】吉田智恵美(ふくい文化創造センター アーツカウンシル部門 アートプロジェクト・コーディネーター)

アートプロジェクトについて県内外の研究者や実践者と多角的に議論

第2部のパネルディスカッション「地域とアートプロジェクト——福井のアーツカウンシルの未来を考える」では、県内外から招かれた研究者や実践者に加え、ふくい文化創造センター長とアーツカウンシル部門ディレクターも入り、多角的に議論が交わされました。

まず、文化政策を専門とする公立小松大学の朝倉由希さんは、第二次世界大戦後にイギリスでアーツカウンシルが生まれた経緯や、横浜や東京、大阪など日本国内でアーツカウンシルが立ち上げられた背景について振り返りました。そのうえで、「アーツカウンシルには明確な定義がなく、地域ごとに位置付けも異なる」と指摘。「大切なのは、それぞれの地域が今、何を目指し、そのためにどんな機能や組織体

制が必要かを検討し、地域固有の課題と資源に即した仕組みをつくり上げていくこと」「福井には福井のアーツカウンシルのあり方があり、どこかを真似るのではなく、それを議論すべき」だと語りました。

さらに、「文化とは上から指示されるものではなく、それぞれの土地や人々の思いから主体的な取り組みや試みが生まれ、続いていくもの」だとしうえて、アーツカウンシルの役割について、「きらりと光る芽を見つけて育てると同時に、担い手同士をつなぐことが大切」だと話しました。

続いて、アーツカウンシル東京の森司さんは、東京都が現在、2030年までに共生社会を実現するという目標の下でアートプロジェクトやNPO支援に取り組んでいると紹介しました。森さんはまず、「ウェルビーイングを目指す活動にとって重要なのは、芸術至上主義に走ることなく、いかに生活の中でアートが機能するのか捉え直すこと」だと指摘。そのう



えて、「担い手」をどう育て、自立へ導くかという視点から「アーツカウンシル制度の担い手はNPOのような組織化された恒常的な活動を目指すべきだ」と述べました。さらに、アーツカウンシルの役割について、「助成金を渡すだけではなく、資金を提供する側が活動する側と対等な形で伴走支援することによって、団体の事務局機能やファクトに基づく運営能力、記録や言語化の能力、そして座組みの設計能力を高め、複数年を見据えたロードマップづくりや自立のプロセスを支える存在」だと強調しました。

また森さんは、アートプロジェクトの定義について「まちなかで実施され、時間軸があること」と指摘。「プロジェクトをマネジメントしている組織や団体が集う場所が継続的につくりられ、活力を保つためには、あらかじめ決められたことを実施するのみならず、やりながら変化し、なんらかの形で記録を残し、アーカイブを構築して自ら更新して評価を行うことが必要」だと話しました。さらに、「途中で未知の出会いがあっても、それを価値化しながら進めていけるしなやかな活動こそがアートプロジェクト」だと話し、「現場の醍醐味は流動性と可変性にある」と、強調しました。

アートプロジェクトの現場から考える地域との関わり方

続いて、沖縄アーツカウンシルの上地里佳さんは、これまで携わってきたアートの実践経験を基に、「可

能性の思考」と「問いの提示」という2つのキーワードを提示しました。

2011年度から2013年度に東京都、アーツカウンシル東京、NPOの3者による共催事業である「東京アートポイント計画」の一環として実施された、三宅島全体を大学に見立てて学びの仕組みをつくる「三宅島大学」や、アーティストと市民が協働しながら富山県氷見市を見つめ、アートの創造性を通じて地域の豊かさを発見する「アートNPOヒミング」の活動などに携わってきた上地さん。漁の際に使われる網を皆で編み、空に掲げるという五十嵐靖晃さんのプロジェクト「そらあみ」などによって、地域に対する記憶を厚くしながら地域全体の文化的基盤を育む実践を紹介しながら「アート支援には地域の資産を見直す態度が不可欠」だと話しました。

さらに上地さんは、「行政が文化芸術を支援する時は、入場者数など分かりやすい数字によってプロジェクトの成否が判断されがち」だと指摘し、「プロジェクトの一つ一つの活動が一人一人にどんな影響を与え、地域にどんな変化が起こりつつあるかという長期的な視点からの評価も大切」だと話しました。そのうえで、「アートプロジェクトには、地域が本来、有している資源や価値をとらえ直すという優しさだけでなく、地域が有している社会的課題を浮き彫りにして問題提起する役割もあるはず」だと述べ、「アーツカウンシルには、採択か不採択かという選考結果によらず、社会的課題への視座を共有し、対話や学びを続ける場を開き地域の文化的な土壌を豊かに



当日は、芸術文化アドバイザーも交えてさらなる議論を行った

する役割もある」と指摘しました。

続いて2024年5月から鯖江市の地域おこし協力隊として活動している中川晴香さんが、自身が担い手として関わる「さばえまつり」について説明しました。神奈川県出身の中川さんは、大学を卒業後、民間企業で6年間、営業職として働いていましたが、自分たちの町は自分たちでつくるという「つくる、さばえ宣言」を掲げる鯖江市に生まれた「さばえまつり」の事務局に誘われ、退職して鯖江市に移住しました。

「さばえまつり」のコンセプトは、「つくるを祝う祭典」です。さまざまな人々が集まって関わり合う中で、さまざまな出来事が日常的に生まれる街の創出を目指し、2024年10月に1回目、翌年9月に2回目が開かれました。鯖江内外から集まった100人以上が3つのチーム（まち）に分かれ、クリエイターやアーティストと協働しながら鯖江市の未来を実験した2回目の模様を紹介しながら、中川さんは「アートやお祭りは、既存の境界線を超えて皆が混じり合うことで予想外なことが生まれる器」「さばえまつりを通じて誰もがそれぞれの興味関心を育み、実験できる舞台をつくりたい」と、熱く語りました。

「さばえまつり」から考えるつながりの広がり

続くパネルディスカッションは、司会の吉田さんが中川さんに「なぜチームを“まち”と呼ぶのか」と問いかけて始まりました。吉田さんの質問に対し、中川さんは「鯖江市の文化や歴史、産業を振り返り、人を知るためにコミュニケーションを図ることで自分たちの理想の“まち”を実験的に再現しようと考えた」と回答。さらに、1年目は1日で約4200人、2年

目は2日間で約7000人が来場したと話しました。

当日、会場を訪ねた渡邊さんは、「会場の中心ではアートプロジェクトの採択団体がブースを複数出して活動紹介を行ったり、紙芝居や絵画展などが次々と行われたりしており、その周囲を取り囲むようにフードやドリンクなどのテントが並んでみんなの祭典という雰囲気があった」と紹介。続いて、選考段階から取り組みを見てきた朝倉さんも、「さばえまつりは、祭りを企画する側に加えて参加する側もイベントをデザインする仕組みになっている」「実施プロセスに多様な人を巻き込んでいく手法が最初から確立してる」と絶賛しました。

また、森さんが、2年目に地元の高中生や障害のある人々も参加できた理由について尋ねると、中川さんは「市役所に相談して高校と連携できたことで、約20人の高校生が授業の一環としてブースを出展してくれたほか、アーティストとして活動している障害のある方とも思いがけず縁ができて、紙芝居をかいてもらうなど地域のつながりが広がった」と、答えました。

もっとも、実施にあたっては地元での調整、場所探しや交渉などの苦労もあったといいます。これを受け、上地さんは三宅島大学の経験を振り返りつつ、「よそ者である自分たちが住民にプロジェクトの目的を説明し、イメージを共有することは簡単ではない」と発言。「さばえまつりも、助成金が終了後にどう継続していくか、今のうちから地域や行政と検討しておくことが必要」と指摘しました。

また、黒田さんは、「身内にとどまらず、外から来た人たちが想像をはるかに超えた成果を出している」と評価したうえで、「新たな成果が次々と生まれるア

ートプロジェクトとは別に、長年にわたって文化活動を続け、定期的に発表するという形で文化振興に貢献している人々も多いことも承知している」と述べ、「ふくい文化創造センターとしては、芸術文化相談窓口や今後生まれる様々な取り組みを通じてそうした方々の取り組みも支援していきたい」と述べました。さらに、福井県内で文化活動に取り組んでいる人々を支援している5つの団体が連携し、助成団体ネットワークが2025年に設立されたことも紹介しました。

福井のアーツカウンシルへの期待

最後に、立ち上げ間もない福井のアーツカウンシルに寄せられる期待について全員で話し合いました。まず、渡邊さんが「着任以来、毎日のようにさまざまなことが起こることに慣れ、現場に足を運ぶという日々だった」と振り返ったうえで、「今日はそれぞれの事業を継続していくために必要なことについて大きなヒントをもらった」「さばえまつりのようにさまざまなプレーヤーを集める大きな器と熱量を有するプレーヤーも現れつつある一方、長期にわたって活動が続いている方々の関わりもある。それぞれの団体のさまざまなインパクトを整理し、しっかり受け取っていききたい」と抱負を述べました。

続いて上地さんは、「東京や沖縄では2012年にアーツカウンシルが立ち上げられたため、良くも悪くもさまざまな前例が溜まりつつある。福井は今後、私たちの経験や課題を踏まえつつ、独自の形を考えられるという意味で、可能性にあふれている」と指摘。さらに、「沖縄アーツカウンシルとしては、採択に至らなかった提案者とも縁を切らず、地域としてどう

文化芸術振興の一環としていかに柔軟に支援していいのか検討していく必要を感じている」との認識を示しました。

また、森さんは「実施に追われ、記録に時間が割けていないアーツカウンシルも多いが、活字や言葉にして残すことで次なる検証点が明らかになる」と指摘し、振り返りの時間の大切さを強調。「アーツカウンシル東京では、年間約10本ずつ活動を記事化しており、これまでホームページ上に300本近く公開している。各団体が独自のスタイルで記録しており、編集は統一されていないものの、言葉を紡いで振り返ること自体が重要」と強調しました。

一方、朝倉さんは「さばえまつりのように、関わっている人の数や来場者の人数が多く、成果が明確な活動だけでなく、成果が数値化されづらい活動もある」「そうした団体への支援が打ち切られることがないように、行政と現場をつなぎ、当事者たちも気付いていない社会的・質的な変化を引き出して伝えていく翻訳者としての役割も、アーツカウンシル部門としては重要」と指摘。「アーツカウンシルには、言葉に変換しづらい小さな取り組みの価値を可視化することにも取り組んでいただきたい」と、期待を示しました。

最後に、中川さんが担い手の立場から、「さばえまつりとアートの関係については、自分自身、腑に落ちるまで時間がかかった」「アーツカウンシルの方々が準備段階から何度も足を運び、活動に秘められたさまざまな価値を見出して言葉にしてくれたことが自信と励みになった」と、振り返りました。

福井のアーツカウンシル 始まりの記録と現在地 期待と手探りの間で歩み続けた2年半

文化芸術活動や実施団体に対して活動経費の一部を助成したり、組織づくりを有効に支援したりするために専門家が審査や評価を行うアーツカウンシル。イギリスで生まれたこの制度が日本の主要都市に導入されて14年近くが経とうとしています。文化芸術を取り巻く環境の変化に伴い、各地域の実情に合わせて地域アーツカウンシルが増えている一方、その役割や位置づけは地域によって大きく異なります。

そんな中、2023年5月に始動した福井のアーツカウンシル的な活動は、どのような議論の下でどのような歩みをたどってきたのでしょうか。制度と現場の間で立ち上げ期ならではの試行錯誤や手探り、葛藤が続いた頃から、自らの位置付けと役割について得心し、手応えをつかみ始めるまでの歩みを言語化するため、ディレクターの渡邊一孝さんのファシリテートで、メンバーが2年半の歩みを振り返りました。その始まりと現在地を記録したこの座談会を通じて、個性豊かなメンバーたちの横顔と真摯な姿勢が浮かび上がります。

ネットワークづくりに奔走した黎明期

黒田 アート振興部長として2023年5月に着任したが、「伴走支援をする」と言われていたものの、各団体の連絡先リストすらなく、最初は正直、途方に暮れました。しかし、以前、県内のスポーツ団体支援の一環でチームの強化やライバル団体の研究に取り組んだことを思い出し、「あの経験が伴走支援に通じるのでは」とも感じていました。そこで、まずはネットワークを構築することが大事だと思い、現場に出向くことから始めました。

渡邊 一緒に着任した東さんは、最初はどのようにお仕事していましたか？

東 私も「伴走支援」という言葉は耳にしたことはあ

りましたが、直前にいた部署は各分野の有識者が助言を行っていたため、「アートの専門性がない自分に何ができるだろう」と不安を感じていました。着任し、ある助成先を訪問した際、丁寧に扱われ過ぎて居心地の悪さを感じ、対等な立場で共創するという距離感をつかめずに戸惑ったのを覚えています。

黒田 採択された団体の側も当時、「伴走支援」される、という意識ではなく、僕らのことを「助成金をくれる人」として見ていたのではないのでしょうか。

渡邊 二人の間で伴走支援とは何か、話し合っていましたか。

東 私たちもよく分かっていなかったため、1年目はとにかく現場に足を運ぶことを心掛けました。

黒田 そんな状況だったため、9月に着任した西村さんに対しても、具体的な業務の指示をなかなか出す

ことができませんでした。

渡邊 西村さんの応募時の思いとその時の業務内容を聞かせてください。

西村 私は大学時代を過ごした福井のことが大好きで、また戻りたい一心から、地域おこし協力隊に応募しました。当時、趣味の音楽活動でハーモニーホールふくいにもお世話になったため、大好きなこの場所で働けることがただ嬉しかったです。助成金のサポートと伴走支援、SNSの発信が私の仕事の範囲だと認識していました。

現場に足を運んで地域の人たちに会うよう、協力隊の事前研修で繰り返し聞いていたのと、もともと座っていることが苦手なこともあって、なるべく東さんと一緒にアートプロジェクト団体の活動を見に行ったり、アート関係のイベントや個展に片っ端から顔を出したりして人脈を広げようと努めました。

渡邊 今、どこに行っても西村さんを知っている人がたくさんいることを考えると、当時、西村さんが人脈やつながりをつくることに注力したのは正しかったと思います。

西村 とはいえ、訪問先で名刺を渡すと、「伴走支援って何を支援してくれるの？」と聞かれて何も答えられず、落ち込むこともしばしばありました。

伴走者としての役割を「腹落ち」した静岡訪問

黒田 その頃は、私はアートプロジェクトに助成金を出して伴走支援することが自分たちのミッションだという意識はあったものの、伴走支援の方法について「腹落ち」できていたわけではありませんでした。

大きな転機になったのは、2023年11月の文化芸術ミーティングに立教大学社会デザイン研究科 特任教授の若林朋子さんを招いたことと、翌2024年2月に東さんとアーツカウンシルしずおかの成果報告会に出席したことでした。そこで、プログラムオフィサーが

グループごとにファシリテートしながら、さまざまなプロジェクトの報告が行われている様子を目にして、ようやくアートプロジェクトとは何かや、伴走者の立ち位置、自分たちの役割について具体的にイメージを持ち始めました。

東 私も、静岡の伴走者たちが支援先の団体とどんな話をし、どのように関係性を築いているのかを目の当たりにして、自分たちと団体との距離感とはまったく違うことに驚きました。同時に、自分たちに期待されているのは、人と人をつなぎコーディネートすることによって、アート分野に限らず、広い人脈が求められているのだと実感しました。

黒田 実際、静岡で会った伴走者の中には、以前、福祉施設で働いていたという人も。伴走支援には、専門家が必要と周りから言われ、自分たちはアートの専門家ではないという不安を抱えながらの活動でしたが、必要なのはコーディネートの専門家なのだと実感し、自分たちにも「出来る」と思ったことを鮮明に覚えています。

渡邊 アートの専門家でなくともできることがあるということですね。

黒田 そうですね。吉田さんのポジションを「コーディネーター」として公募したのもそうした経緯があります。また、静岡で学んだことを実行すべく、団体の活動を言語化して残したり、発信したりする必要性を感じ、すぐに成果報告集の作成に着手しました。さらに、翌年度にはホームページで団体ごとの活動を紹介するコンテンツも作りました。

渡邊 ミッションに気付き、ふさわしい仲間が欲しいという思いからコーディネーターを募集した背景を吉田さんはどこまで知っていましたか。

吉田 経緯は知りませんでしたが、当時は、直前までアート業界における市民協働の分野で働いていて、コロナ禍によって生まれた市民の間の文化芸術への温度差や世代差に難しさを感じたり、会期が終わっ



金子由紀子



吉田智恵美



西村美穂



黒田光亮



渡邊一孝



東千尋

ても、正直、「やり切った」とは言い切れず、自分の仕事を終えられた感じがしていませんでした。もう少しこういう仕事を続けたいとの思いから、“アートコーディネーター”“マネジャー”で応募先を検索し、締切直前で応募しました。実家が埼玉にあり、北陸新幹線が開通したことで大宮から福井まで1本で来られるというのも魅力的でした。

黒田 吉田さんが合流し、西村さんとペアで各方面に具体的な動きを仕掛けてくれたことで、少しずつ今の活動の土台ができ上がっていったという印象です。

吉田 西村さんや東さんが準備してくれていたため、土地のことを知らない私でもスムーズに活動を始められたと思います。特に西村さんはすでに色々な場所まで回り、経験も人脈も築いていたため、最初のうちは県内の地理も含めて OJTのように教えてもらいました。

西村 私はアート分野に専門性がないことに引け目を感じていたので、アート分野出身の吉田さんが入ってくることになったのは嬉しかったです。

吉田 県内のプロジェクトは様々なものがありますが、その中にはボトムアップ型の芸術祭もあります。日本各地で独自の芸術祭が生まれる中、私たちの伴走支援への知識を深める目的もあり、2024年の10月に新潟と長野で開かれた2つの芸術祭を西村さんと一緒に回りました。作品を見るだけではなく、現地のボランティアの方や観光協会、事務局の方へのヒアリングを重ねました。レンタカーで移動するせわしない滞在でしたが、とてもいい経験でした。

西村 私も「芸術祭に一度も行ったことがない人間が伴走支援するなんて言えない」との思いもあり、吉田さんに同行することにしました。

長野県の奥地にある廃校で行われていた巨大なインスタレーション作品が特に印象に残っています。研究的なアートが存在することや、芸術祭のコンテンツにすることで、アクセスが悪いところでも人が集まということを知り驚きました。

「アート支援は担い手支援」ターニングポイントのたびに吹いた外部からの風

黒田 次のターニングポイントは、2024年12月の文化芸術ミーティングに信州アーツカウンシルゼネラルコーディネーターである野村政之さんを招いたことだと思います。野村さんが「アーツカウンシルによる支援は担い手への支援」だと言い切っていたのが衝撃でした。「僕たちがすべきことは、アーティスト支援だけではない」と納得した瞬間でした。

東 懇親会では、野村さんが現場をいかに回ってい

るか聞くことができました。顔を出し、「ちゃんと見ているよ」と相手に伝えることが大切だとお話しされていたのが印象的でした。

吉田 着任してから4カ月間、福井県を知ろうと県内を積極的に回っていたタイミングで、野村さんや文化コモンズ研究所代表の大澤寅雄さんが外部からの風を運んできてくれました。県内の人たちで作り上げることに加えて、外部にいる良き有識者を知っているなら、福井らしさを失わない程度にその力を借りればいいと感じました。誰と誰をつなげればもっと良くなるのかな、とぼんやり考え始めたのもこの頃でした。

渡邊 話を聞いていると、ターニングポイントのたびに外から風が吹き、それを吸収しては形にしていますね。

西村 刺激を現実にと落とし込むことができる黒田さんの柔軟性とスピード感ゆえだと思います。タイミングを逃すと1年後になるところを、毎回、逃すことなく形にしていることに驚かされます。また、他県にアーツカウンシルの先行事例があるからこそ、最短距離で進んできているとも感じます。

吉田 福井はアーツカウンシルと県の文化課との距離が近く、県の人たちも柔軟だからこそ私たちは現場で活動できている。そうでなければ、いくら現場から声を挙げても、形にしていくことはできなかったと思います。

渡邊 気付きを得た瞬間に希望が生まれ、変化と共にモチベーションも上がっていく。そうした周期が押し寄せる波のように訪れては、着実にレベルが上がっていることが素晴らしいですね。立ち上げ間もない道程をこうして試行錯誤しながら一緒に歩んでいる柔軟性こそ、福井のアーツカウンシルの一番の特徴かもしれませんね。

黒田 いくら僕が言っても、みんなが「やってみましょう」と乗ってくれなければ進みません。みんなのおかげで活動報告集やガイドブックを作ることができました。その後、我々の歩みを他県の人たちに簡単に説明した際、皆に関心を持ってもらえたことで、「僕らがやろうとしてきたことは間違っていない」と思えたのは嬉しいことでした。

渡邊 そもそも「アーツカウンシルとは何か」についてはどんな議論がありましたか？

黒田 アーツカウンシルをどこまで理解していたか、今となっては理解がまったく足りなかったと思います。

それまでは、助成金を出す代わりに、県民のみなさんを我々が進みたい方向に誘導する機能だと思っていましたが、実は我々がやろうとしているのは誘導ではなく、うまく引き出すことなのだと分かりました。

そこで、アーツカウンシル機能を持つためにディレクターが必要だと考え、公募しました。そこに着任したのが、渡邊さんでした。渡邊さんは着任してみてどんな印象でしたか。

渡邊 私はこれまでずっと映画の世界で活動してきて、助成金をもらったこともありましたが、助成する側になって視界が広がったと感じています。僕は「この人たちとなら次にどんな可能性が見えるか」という具合に属人的に動くタイプで、このチームと出会ってから、どんどん頭が働きわくわくしています。

だからこそ、着任すぐに、アーツカウンシルやアートプロジェクトについてみんなが納得したり言語化しきれていない様子が気になりました。そこで、まずこれらのキーワードを分解して考えることにしました。最初の頃はみんなで何度も議論して、その後は一人ずつ話しかけて意見を聞くというやり方に変えて進めていきました。

金子さんが着任したのは、そんなタイミングでした。

金子 私はこれまで、アーティストが手掛けるアートプロジェクトを学芸員として共につくる、いわば担い手側にいました。「支援」とは具体的に何をするのかを知らず、アーツカウンシルについても「助成金を出す団体」という程度しかイメージがありませんでした。しかし、着任して数日目にこのメンバーで長い時間かけて「アートプロジェクトとは何か」を話し合ったことが強く印象に残っています。そうした根

プロフィール

黒田光亮 (くろだ・みつあき)
ふくい文化創造センター長／事務局参事
福井県永平寺町出身。1997年、福井県庁に入庁。原発立地地域振興や、スポーツ振興業務などに携わる。スポーツ振興業務において、競技団体に寄り添いながら競技力向上対策を行い、福井国体の優勝に貢献。2023年5月より現職、ふくい文化創造センターの立ち上げに貢献。スポーツ分野での経験をアートプロジェクト実施団体の伴走支援に活かす。アートとは無縁の生活を送ってきたが、文化活動を行う県民に触れ、今では暮らしの中での文化の大切さが身に染みて感じている。

渡邊一孝 (わたなべ・かずたか)
ふくい文化創造センター アーツカウンシル部門ディレクター
福井県福井市出身。大学卒業後、映画配給会社などを経て、2014年に映画や翻訳字幕を制作する株式会社E.x.N(エクスン)を設立。以後、国際共同製作を中心としたインディペンデントな映画のプロデュース・配給、山形国際ドキュメンタリー映画祭のプログラマー、市民を対象にした映像の鑑賞ワークショップ「見たことないモノを観てみる会」主宰など、映像に関する多方面の活動を行っている。文化と市民との関係について、より考えるべくアーツカウンシルに応募。2025年7月より現職。

東千尋 (あづま・ちひろ)
ふくい文化創造センター 伴走支援スタッフ
福井県福井市出身。2020年、福井県庁に入庁。NPO・ボランティア活動の支援業務に携わる。2023年5月より現職。ふくい文化創造センター立ち上げに貢献。担い手の想いから始まる多様なアートプロジェクトに触れていく中で、アートプロジェクトに関わる人や地域に与える力を実感する。現在、自身のアートプロジェクトの立ち上げを思案中。

本的な問いを掲げ、忌憚なく発言し合えてとても楽しかったです。

渡邊 僕たちにしてみれば、金子さんは初めての学芸員資格保持者でした。

金子 学芸員は担い手である一方、アートプロジェクトをコーディネートするポジションは支援者であるため、両者は違うと私は思います。ただ、私自身は、以前、青森でアーティスト・イン・レジデンスの現場に10年ほど関わっており、地域の方々にボランティアとして関わってもらいながらアートをつくり上げていく過程に面白さを感じていたため、今のポジションとも相性が良かったと感じています。

また、現代アートの世界には、そこに続く美術の長い歴史や制度がありますが、今は制度の枠の外で市民が自由に取り組んでいるのを目の当たりにして、自分の中で世界が広がっています。

渡邊 歴史という言葉を使うと、道のりが一本化されてしまう印象がありますが、黒田さんと東さんが最初に着任してから、さまざまな人との出会いがあり、次々とメンバーが着任して複数の出来事が並行して起こる中で、現象としてアーツカウンシルが立ち上がっていく様子をみんなで振り返ることができました。

現在地を確認できた今、アーツカウンシルとして福井の文化芸術活動を守り育てていくという使命を果たすべく、みんなで一丸となって取り組んでいきたいです。

金子由紀子 (かねこ・ゆきこ)
ふくい文化創造センター 伴走支援スタッフ
秋田県秋田市出身。2006年から2年間、JICA 青年海外協力隊(現・JICA 海外協力隊)としてトンガ王国に赴任し、職業訓練学校の美術コースで講師として活動。2011年からは青森公立大学国際芸術センター青森で学芸員として10年にわたりアーティスト・イン・レジデンスや展覧会、教育事業を担当した。2021年からはカナダのブリティッシュコロンビア大学大学院修士課程で3年半学び、2025年9月より現職。業務の傍ら、修士研究を更に深めるために奮闘中。

吉田智恵美 (よしだ・ちえみ)
ふくい文化創造センター 伴走支援スタッフ
埼玉県狭山市出身。日本大学大学院理工学研究科建築学専攻前期課程修了。大学在学時からさまざまなアートプロジェクトに触れ、卒業後は国際芸術祭や美術館などで、市民協働や教育普及に関する業務に従事。並行して音楽大学でジャズを学び、ピアノ／オルガン奏者・作曲家としての活動も開始。2024年9月に現職に着任してからは、業務に注力するかたわら、自身の創作・演奏にも一層、積極的に取り組んでいる。

西村美伽 (にしむら・みか)
ふくい文化創造センター 伴走支援スタッフ
三重県四日市市出身。福井大学教育地域科学部を卒業後、愛知県内の自動車部品製造会社で8年間勤務したが、福井のことが大好きで、2023年9月に現職に着任。5歳からピアノを習い、中学入学から大学を卒業するまで吹奏楽部で打楽器奏者として活躍。音楽ライブや美術展などもジャンルを問わず積極的に鑑賞する。

県民の声と応援メッセージ

県民の皆さんから福井のアーツカウンシルや文化芸術への期待、思い、疑問など、さまざまな率直な声、また、芸術文化アドバイザーの皆さんからも、温かい応援メッセージをいただきました。

県民の声

どうしたら福井に「文化」が再構築できるのでしょうか。それは「文化」と言わずに「福井とは何か」から考え始めることではないでしょうか。

県民の声

（助成金は）活動資金を得るための材料と思っていましたが、もっと自由に動こうと思いました。

県民の声

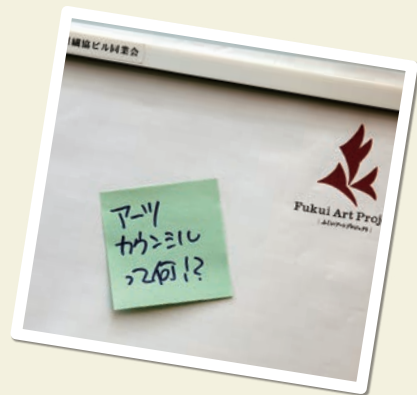
福井のアーツカウンシルの伴走支援ってどんなことをされているのだろう。

応援メッセージ

吉村正照 氏

（仁愛女子短期大学生活科学学科生活情報デザイン専攻准教授）

6月のキックオフでは29団体もの多様なプレゼンテーションに触れ、福井の文化芸術の層の厚さに驚かされました。まだすべての活動を拝見できてはおりませんが、いくつかの現場を訪ねる中で、関わる皆様の熱量を肌で感じる事ができました。12月のミーティングでは、福井のアーツカウンシルが、多様な挑戦を育む土壌を丁寧に整えている姿に明るい未来を実感しました。今後は団体同士の交流から生まれる化学反応により、福井の独自性がさらに深化していくことを期待しています。



県民の声

文化が地域社会にどう関わっていくべきか、可能性を感じることができました。

応援メッセージ

加藤種男 氏

（（公財）福井県文化振興事業団副理事長）

文化芸術も時代とともに変化します。県民が主体の地域の文化芸術活動であるアートプロジェクトが主流となる時代が来しました。これを応援するために、アーツカウンシル機能を備えた「ふくい文化創造センター」もできました。これらを活用しながら、県民自らが創意工夫して様々な活動が広がっています。そうした活動を現場で拝見してまわるのですが、たまり場がほしいと思うことが多くあります。折角のいい活動だから、拝見した後にお話を聞いたり一休みしたりできる喫茶の場が欲しいのです。アートプロジェクトには、ぜひコミュニティカフェの機能を期待しています。

県民の声

アーツカウンシルは駅前など、ハーモニーホール内を出てやってほしい。

県民の声

イベントを開催するのがゴールや目的ではなく終わってから町がどう変化したのか検証しなければ打ち上げ花火的になってしまう。

県民の声

みなさんが思うアートとは？というテーマで話をしたい。アートの役割についてみんなの考えを聞きたい。

県民の声

福井で面白いことしてる、しようと思っている人が思いのほか多いのかもしれない。

応援メッセージ

野田訓生 氏

（金津創作の森美術館館長）

公立美術館で長く仕事をしてきたせいか、芸術への助成は、直接作家や展覧会を支えるものだという意識が当たり前になっていました。アートプロジェクトを知る中で、その前提が揺さぶられ、多様な人たちがそれぞれのやり方で地域に芸術を立ち上げている現実、いつも考えさせられます。美術館の活動と市民の実践は、互いに影響し合う両輪だと思います。その両輪は、同じ方向へ真っ直ぐ進むのではなく、蛇行ジグザグに歩みながら地面を耕すようなものかもしれません。助成の枠組みそのものが、現場の試みによって変えられていく姿も期待しています。

応援メッセージ

浅野桃子 氏

（福井工業大学環境学部デザイン学科教授）

誰しもうがすでに「アートプロジェクトなるもの」を持っていると思います。でも持っているだけではもったいない、「アートプロジェクトなるもの」を動かしてみたら自分のことがもっとおもしろくなって、地域や場所と人としなやかに関係を保ちプロセスを楽しみながら共創していくことにのめり込んでしまうかもしれません。だからアートプロジェクトをはじめよう。プロジェクトを進めていけば思い通りにならないことやトラブルなど変化がもちろんあるでしょう。うれしいことも楽しいことも困ったことも一緒に楽しんでくれるふくい文化創造センターの皆さんがいます。

県民の声

もっと色々な方とつながって色々なことをしてみたい。



応援メッセージ

遠藤幹子 氏

（京都芸術大学大学院教授）

福井県のアートプロジェクト支援事業が、点だった活動が少しずつ繋がり、広がりをもって育ってきたことを嬉しく感じています。団体同士の出会いや対話、若い世代による地域とアートを結ぶ挑戦、そして手厚くなってきた伴走体制。その積み重ねはとても素晴らしいものです。今後は、県内外の人が福井のアートの動きを気軽に知ることができる拠点や発信がさらに充実し、あわせて各団体が活動の痕跡を地域に示せるサインなどの環境整備も支援の対象として広がることで、季節を越えてアートと地域の関係が感じられる風景が福井に育つことを期待しています。

県民の声

表現することの敷居が低くなった。

編集後記

今回の活動報告集では、私たちが誰なのか(福井に新しくできたアーツカウンシルやスタッフの紹介)、そして、アートプロジェクトの採択団体の方々がどんな想いでどんな活動をしているのか、さらには、スタッフたちがどのようなスタンスで、私たちが目の当たりにしている巨大なミッションである「県民主体の 多種多様な文化芸術活動を 複雑さを保ちながら より多く未来に残していく」に向き合っているかを可視化することを念頭に制作を進めて参りました。ご協力いただいた皆さま、誠にありがとうございました。

昨年7月に着任してから私が感じていたのは「“アーツカウンシル”や“アートプロジェクト”の言葉そのものが分かりにくい。ましてや、その成果も測りにくく伝えづらい。」ということでした。では、それらをどうやって伝えるか。より濃い内容の報告集を作ることはこういった背景から生まれたものでもありました。すると、見えてきたのは、現在、福井に既に存在する多くの多様な活動、そして、それぞれに社会を見つめ、自分ができることを思考し、仲間や資金などのリソースと相談してようやく活動に漕ぎ着ける担い手の姿でした。今年度に採択された44プロジェクトの重みは、ただの数字「44」ではありません。担い手、アーティスト、協力者、参加者、観客や鑑賞者まで、多様な関わり手がいる中で、発想から決断を経て実現にかかった時間とエネルギーを考えると、その効果や影響は計り知れません。それぞれの活動が、幾多の奇跡を経験して変化を遂げ、未来の福井にとってなくてはならない活動となる可能性を垣間見るたび、対峙する私たちはピリッと襟を正しながら、強い喜びと責任を感じるのです。

来年度の「ふくいアートプロジェクト助成金」に向けた事前相談の件数は100件近くとなりました。今後も、助成金の名が広がっていくごとに、競争率は高くなっていくことでしょう。ただし、採択とならなかったとしても、私たちと繋がり、関わることを続けていただければと思います。漠然とした相談や話に来るだけでも構いません。私たちのミッションは、採択団体の伴走だけではなく、県民主体の多種多様な文化芸術活動を未来に残していくことですから。まだまだ、スタートしたばかりのチームではございますが、福井のアーツカウンシルを今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

令和8年3月

ふくい文化創造センター
アーツカウンシル部門
ディレクター 渡邊一孝

令和7年度 アートプロジェクト支援事業 活動報告集

発行日：2026(令和8)年3月
発行者：(公財)福井県文化振興事業団 ふくい文化創造センター
〒918-8152 福井県福井市今市町40-1-1(福井県立音楽堂内)
TEL：0776-38-8280(代表) FAX：0776-38-8285
MAIL：geibun@hhf-cf.or.jp
WEB：https://www.fukui-culture.or.jp/

執筆：玉懸光枝(インタビュー、座談会、採録)、採択団体の皆さま、アーツカウンシル部門スタッフ
編集：渡邊一孝、東千尋
デザイン：村松道代(Taohaus)
スチール撮影：小泉涼(「文化芸術ミーティング2025」記録)
挿絵：吉田智恵美

(公財)福井県文化振興事業団 ふくい文化創造センター
センター長 黒田光亮
アーツカウンシル部門 ディレクター 渡邊一孝
伴走支援スタッフ 金子由紀子、吉田智恵美、西村美伽、東千尋
芸術文化アドバイザー(アートプロジェクト担当) 朝倉由希、浅野桃子、遠藤幹子、加藤種男、窪田研二、野田訓生、吉村正照

*アートプロジェクト支援事業助成金は、福井県から委託を受けて実施しています。



web



Instagram



LINE



公益財団法人 福井県文化振興事業団
ふくい文化創造センター